

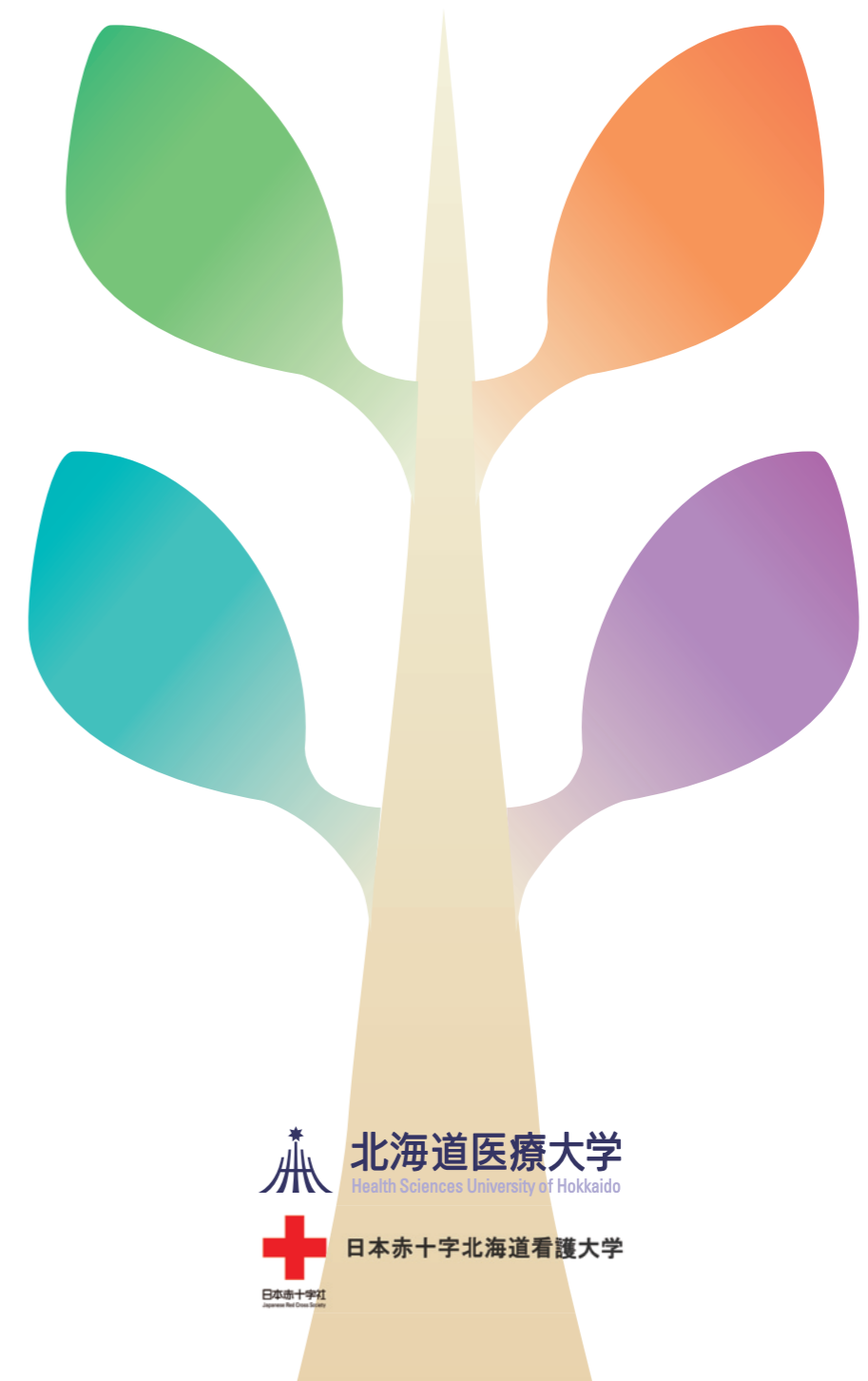
平成22年度 社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託業務成果報告書

地域格差のない医療情報提供のための


薬剤師・看護師 教育プログラム

成果報告書

[整理番号 7444]



 北海道医療大学
Health Sciences University of Hokkaido

 日本赤十字北海道看護大学
Japanese Red Cross University of Nursing Hokkaido

はじめに

札幌と北見をインターネットで結び、リアルタイムに講義と演習を進める、ユニークなリカレント(学び直し)・プログラム、「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム」は、平成22年度の事業終了をもって、準備期間を含めて3年間の全事業を無事完了いたしました。

実施2年目となる本年度は、前年度の経験と反省、また外部評価委員からいただいた貴重なご助言に基づき、インターネットでの映像通信の安定化と音声バックアップの強化、受講生相互間の交流支援をすすめるとともに、複数の専門分野の選択を可能とする、プログラムの一層の充実に努めました。前半の共通基礎プログラムでは、情報リテラシー、患者コミュニケーションを中心とした基礎的知識と技能の習得、また後半の演習を含む専門プログラムでは、生活習慣病(糖尿病)、感染症(抗菌薬の適正使用)、メンタルヘルス(ストレス)、がん(緩和ケア)の4分野で最新の情報が提供されました。本年度は、76名の受講生のうち54名に修了証を授与することができました。熱心な受講生の皆様が、それぞれの臨床現場で学びの成果をおおいに活用されていることと確信しております。

プログラムの運営には、北海道医療大学総合図書館がもつ情報サービス・教育支援機能を総動員するとともに、日本赤十字北海道看護大学はじめ、関係機関から教職員の皆様の多大なご支援、ご協力をいただきました。加えて北海道薬剤師会、北海道看護協会、特定非営利活動法人日本医学図書館協会、日本薬学図書館協議会などの多くの職能団体からご協賛をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。就中、受講生を惹きつける魅力的な講演・演習をご担当いただきました講師の諸先生、プログラムの円滑な運営のため多大なご尽力をたまわりました実行委員の諸先生、また、建設的なご助言と評価をたまわりました外部評価委員の諸先生に衷心より感謝申し上げます。最後に、この3年間縁の下でプログラムの運営をしっかりと支えてくださった事務局スタッフの皆様に慰労と感謝の意を表します。

ここに最終年度(平成22年度)の事業内容と成果をご報告申し上げます。

事業担当者
北海道医療大学総合図書館
図書館長 田隈 泰信



平成21年度 社会人の学び直しニーズ対応
教育推進プログラム委託業務成果報告書

地域格差のない医療情報提供のための
薬剤師・看護師教育プログラム

目次

本事業企画の背景	6
事業プログラムの概要	7
事業プログラムの目的と到達目標	7
事業プログラムの実施体制	7
平成22年度事業プログラム業務実績	8
プログラム実施報告	9
プログラム評価	32
プログラムコアメンバーによる打ち合わせ	38
プロジェクト評価(第三者評価委員会記録)	40
参考資料	43

[平成22年度年度事業実施体制]

●プロジェクトコアメンバー

田隈 泰信	北海道医療大学総合図書館長(事業担当者)
唯野 貢司	北海道医療大学薬学部教授
豊田 栄子	北海道医療大学薬学部教授
塚本 容子	北海道医療大学看護福祉学部教授
桑原 ゆみ	北海道医療大学看護福祉学部准教授
二瓶 裕之	北海道医療大学薬学部准教授(ICT担当)
根本 昌宏	日本赤十字北海道看護大学准教授
平 紀子	北海道医療大学学務部次長(事業事務担当者、ヘルスサイエンス情報専門員上級)

●第三者評価委員

高橋 保志	委員長、北海道薬剤師会医薬情報センター長
平川 由紀子	北海道看護協会常任理事(教育研究担当)
五十嵐智嘉子	北海道総合研究調査会常務理事
黒澤 和子	一般(薬剤師)

1. 本事業企画の背景

近年、わが国では少子高齢化が社会的問題となっている。地域の中では医療技術だけでなく病気や障害、そして予防のためのコミュニケーション能力をもつ地域住民のヘルスコンサルタントとしての薬剤師や看護師が必要とされている。また、これらのコメディカルスタッフにはチーム医療の一員として、全人的ケアの視点に立つことが求められており、幅広い多様な情報を探し出すための知識や技術と共に、入手した情報の質を見極めるための情報リテラシー能力が求められている。このプログラムの基盤となっているのは、2004年から2007年にわたり、道内の医療従事者(医師、歯科医師、薬剤師、看護師)を対象に、臨床現場の情報環境と情報ニーズ調査1)2)3)に基づき、図書館の情報提供サービスのあり方の検討結果である。近年は地域における医療系大学図書館の医療情報提供機能に着目し、住民への医療情報提供などの関わりについて検討した4)。これらの調査結果および文献情報検索講習会5)終了後のアンケートから、医療従事者の中でも、とりわけ薬剤師や看護師は臨床現場で必要とする情報を入手するために、信頼性の高い情報源の選択とアクセスに障壁があり、入手した情報に満足していないことが明らかになった。

臨床現場において地域住民・当事者が治療における意思決定のため、疾患及び治療の理解を含めた医療情報リテラシーの向上が重要となってきている。しかし医療情報を提供する側、特に遠隔地の臨床現場で働く薬剤師・看護師は最新の医療情報取得や相談スキルを向上させる機会が少ないという問題があり、地域住民への医療情報提供が十分といえる状況ではない。

以上を踏まえ、本事業は、地域格差のない医療情報を住民に提供するため、臨床現場で働く薬剤師・看護師が最新の情報を入手・提供できる能力育成を目的とした教育プログラムを企画するに至った。広域な道内の医療情報格差問題を解消させることを目的に、特に大都市圏から離れた遠隔地の医療機関に勤務する薬剤師・看護師に焦点を当てる。両者が共通の講義を受けることにより、双方の強みをお互い吸収しながら、今後のチーム医療提供に役立つ他職種の協働のあり方について

学習できる。また、患者教育演習を組み込むことにより、自ら情報源へアクセスすることを学ぶ能力と共に、実践する能力を培うためのプログラムとした。

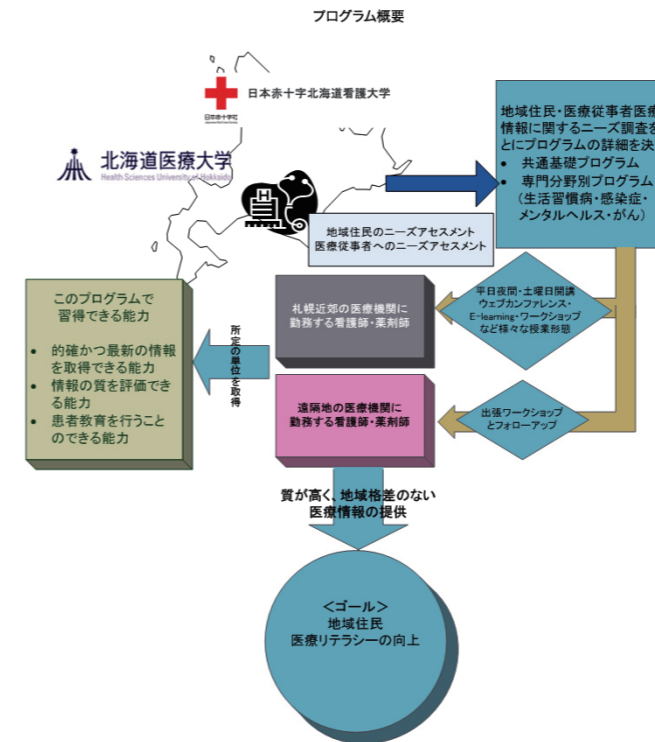
教育プログラムの内容は、「共通基礎プログラム」にて、質の高い文献の入手方法と共に、それらの情報をもとに患者教育の実践教育を行うことのできる能力を培う。基礎共通プログラム修了者は引き続き「専門分野別プログラム」にて学習を行う。遠隔地の受講者に配慮し、地理的、時間的な制約を受けることなく受講できる、対面講義・ワークショップの他に、e-learning、ウェブカンファレンス形式など、多様な授業方式を採用した。

[引用文献]

- 平 紀子「医療従事者と医療系図書館員の情報サービスにおける意識のギャップ」情報の科学と技術 第57巻8号 p.404-409. 2007.
- 平 紀子「薬剤師の情報ニーズと薬学系大学図書館における役割」薬学図書館 第52巻3号 p.211-219. 2007.
- 平 紀子、三国久美「保健師の情報ニーズと医療系大学図書館の役割」医学図書館 第54巻2号 p.166-172. 2007.
- 平 紀子「地域における医療系大学図書館の医療情報提供機能に関する研究」学位論文 2008.3.25
- 薬剤師・看護職を対象に図書館が主催した文献情報検索講習会

セミナー名/開催日時・場所	参加者数
看護師リフレッシュセミナー 2004.11.20 / 本学札幌サテライトキャンパス	26名 (看護師)
わかりやすい文献検索法 「看護研究に役立つ文献情報検索のためにパソコンでデータベースを検索してみませんか」 2006. 5.29 / 北海道看護協会	60名 (看護師)
薬剤師研修セミナー 「わかりやすい文献情報検索法」 (本学薬剤師研修センター・北海道薬剤師会共催) 2007.11 / 本学札幌サテライトキャンパス	36名 (薬剤師)

2. 事業プログラムの概要



3. 事業プログラムの目的と到達目標

■教育プログラムの目的:

地域格差のない的確な医療情報を地域住民へ提供するために、薬剤師・看護師が質の高い情報を探し出すための知識・技術を向上させることにより、地域医療の活性化を目指す。

■医療情報提供者としての到達目標

- 最新の情報収集方法を身につけることが出来る。
- 情報の質の評価方法を身につけることが出来る。
- 最新の情報に基づいて、患者教育を行うことが出来る。

4. 事業プログラムの実施体制

事業目的の実現に向けた実施体制は、以下のとおりである。

(1) 事業組織体制

プログラムの開講準備を進めるため、プロジェクトコアメンバーの構成員を北海道医療大学の薬学部教員2名、看護福祉学

部教員2名、ICT教員1名、図書館員2名、日本赤十字北海道看護大学の教員2名とした。また、各プログラムをとりまとめるための担当教員を分野別に配置した。

(2) プログラム実施協力機関・団体等

広報	社団法人北海道薬剤師会、社団法人北海道看護協会
演習担当講師	特定非営利活動法人日本医学図書館協会、日本薬学図書館協議会
データベース電子ジャーナルなどの提供	独立行政法人日本科学技術振興機構、特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会、EBSCO Publishing、Wolters Kluwer Health Ovid、エルゼビアジャパン株式会社、トムソンコーポレーション、メテオインタゲート、丸善、紀伊國屋書店他
第三者評価委員	北海道薬剤師会医薬品情報センター長、北海道看護協会教育常任理事、北海道総合研究調査会常任理事、患者代表

(3) 教育方法

本プログラムでは共通基礎プログラムにおいて、質の高い文献入手方法、患者教育を行うことのできる能力を培う。共通基礎プログラム修了者は専門分野を選択し、専門分野別の学習を行う。効果的な授業を行うため、講義形式、ワークショップ、ウェブカンファレンス、e-learningなど、多様な授業方式を採用した。プログラム修了者には地域でのリーダーとして活躍できるよう継続して支援を行う。

(4) 受講特典

日本薬剤師研修センター認定研修、認定看護師認定更新自己研鑽ポイント

(5) 事業評価

第三者による評価委員会を組成し、受講者からの評価などを踏まえ、臨床現場の薬剤師・看護師にとって妥当なプログラム構成内容になっているのかを見極め、次年度のプログラムに反映させる。

5. 平成22年度事業プログラム業務実績

平成21年度に引き続き、以下の取組を行った。(詳細内容は別添参考資料)

(1) 業務実施日程

項目	実施期間											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
受講生募集	■	■										
第三者評価委員会			■								■	
プログラム実施			■	■	■	■	■	■	■			
修了証授与										■		
CINAHL検索ガイド作成			■	■	■	■	■	■				
事業成果報告書作成									■	■	■	■

(2) 業務の実績

① 受講生の募集

受講受付を平成22年4月1日より当プログラムホームページおよびFAXで行った。その結果、定員を上回る76名の応募があり、プロジェクトコアメンバーによる打合せを行い、受講会場の環境整備状況などについて検討した結果、札幌・北見会場、およびe-learning受講者を含め76名とすることを決定した。

② 第三者評価委員会の開催

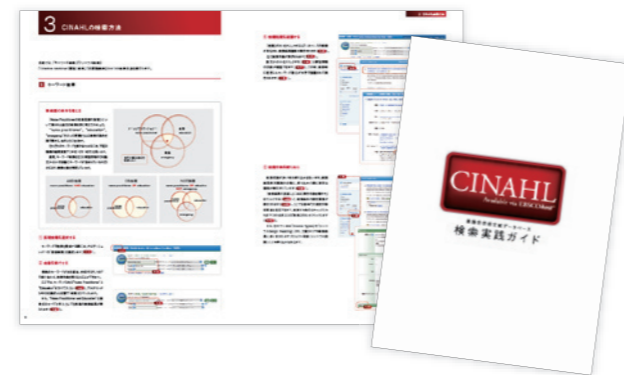
当プログラムの外部評価を行うため、北海道薬剤師会、北海道看護協会、北海道総合研究調査会、患者代表(薬剤師)による第三者評価委員会を開催した。第1回(平成22年5月25日開催)では、最終年度を迎えるプログラム事業計画と評価方法を、第2回(平成22年12月17日開催)では、前年プログラム評価との比較を踏まえた総合評価を行った。

③ プログラムの実施

平成22年6月1日から11月27日の間、全17回(共通基礎プログラム13回、専門分野別プログラム4回)の講義・演習(総学習時間25.5時間)を実施した。プログラムの内容は次頁のとおりである。なお、所定の基準を満たした受講者54名に修了証を発行した。

④ 「CINAHL」検索マニュアルの作成

「CINAHL」を刊行し、受講者および当プログラム協力団体への配布を行った。



⑤ 第27回医学情報サービス研究大会における発表

平成22年8月21日、22日、いわき明星大学に於いて開催された第27回医学情報サービス研究大会で「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム—医療従事者のリカレント教育プログラムへの取り組み」をテーマに発表した。



プログラム実施報告

共通基礎プログラム

コンピュータスキル向上プログラム	12
情報検索スキル向上プログラム	14
情報の質評価スキル向上プログラム	16
患者教育スキル向上プログラム	18

専門分野別プログラム

生活習慣病：糖尿病	24
感染症：抗菌薬の適正使用	26
メンタルヘルス：ストレス	28
がん：緩和ケア	30

平成22年度 地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム

●共通基礎プログラム：計19.5時間

プログラム	札幌会場	北見会場	講師
開講式・アイスブレイキング	6月1日(火) 18:00~	6月5日(土)13:00	
【コンピュータスキル向上プログラム】 目標：医療情報入手に必要な不可欠なコンピュータの基礎、患者教育に必要なプレゼンテーションソフトの使用法を学習する。			
第1回：コンピュータ操作の基礎 [北見：6月5日(土)]	6月1日(火) 19:00~20:30	6月5日(土) 13:00~17:00	二瓶 裕之(本学准教授)
第2回：インターネットの基礎 [北見：6月5日(土)]	6月12日(土) 14:00~17:00		二瓶 裕之(本学准教授)
第3回：プレゼンテーションの作成 [北見：6月5日(土)]			
【情報検索スキル向上プログラム】 目標：医療情報入手のためのデータベースを用いた情報検索方法を学習する。			
第1回：データベースへのアクセスの基礎	6月26日(土) 14:00~17:00	同時配信	平 紀子(本学学務部次長、ヘルスサイエンス情報専門員上級)
第2回：医療情報検索の基礎 -演習-			
第3回：薬剤情報検索の基礎 -講義と演習-	7月3日(土) 14:00~17:00	同時配信	小林 道也(本学准教授)
第4回：薬剤情報検索の基礎 -講義と演習-			
【情報の質評価スキル向上プログラム】 目標：入手した医療情報の信頼性・妥当性が検討できる能力を学習する。			
第1回：地域における臨床研究の基礎	7月13日(火) 19:00~20:30	同時配信	前沢 政次(北海道大学名誉教授)
第2回：エビデンスに基づいた医療提供とは何か?	7月31日(土) 14:00~17:00	同時配信	山本 和利(札幌医科大学教授)
第3回：文献クリティクスの基礎			
【患者教育スキル向上プログラム】 目標：入手した質の高い医療情報をもとに患者教育を行うことのできる能力を学習する。			
第1回：患者の声が医療を変えはじめた！<公開講座>	8月7日(土) 14:00~15:30	同時配信	大熊 由紀子(国際医療福祉大学教授)
第2回：慢性疾患を持つ人のセルフケア能力を高める看護支援	8月10日(火) 19:00~20:30	同時配信	本庄恵子(日本赤十字看護大学准教授)
第3回：医療とコミュニケーション<特別公開講座>	8月28日(土) 14:00~15:30	同時配信	朝倉 利光(北海学園大学学長)
受講者・講師による懇談会	8月28日(土) 15:30~17:30		

●専門分野別プログラム：各分野6時間(4分野から1分野選択)

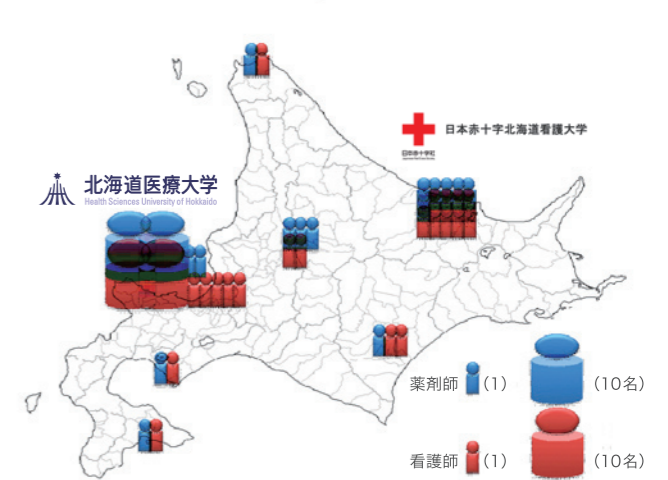
プログラム	札幌会場	北見会場	講師
【生活習慣病：糖尿病】 目標：糖尿病に関する最新の医学的知識、そして最新の情報収集方法を学習する。また、患者教育について演習を通して学習する。			
第1回：糖尿病に関する最新の医学的知識とその情報収集方法	9月7日(火) 19:00~20:30	同時配信	辻 昌宏(本学教授)
第2回：地域における医療情報の集積と糖尿病の予防と治療	9月28日(火) 19:00~20:30	同時配信	西平 順(北海道情報大学教授)
第3回：情報検索演習			諏訪部 直子(ヘルスサイエンス情報専門員上級)
第4回：患者教育演習	10月16日(土) 14:00~17:00	同時配信	桑原 ゆみ(本学准教授)
【感染症：抗菌薬の適正使用】 目標：近年医療施設で問題となっている多剤耐性菌についての発生機序、それを予防するための抗菌薬の適正使用、そして発生した際の対応に関する最新知識を講義、演習を通して学習する。			
第1回：多剤耐性菌発生時の拡大予防 -環境汚染に焦点を当てて-	9月14日(火) 19:00~20:30	同時配信	塚本 容子(本学教授)
第2回：抗菌薬使用耐性サーベイランス	10月5日(火) 19:00~20:30	同時配信	唯野 真司(本学教授)
第3回：情報検索演習			河合 富士美(ヘルスサイエンス情報専門員上級)
第4回：多剤耐性菌の事例検討：医療施設での多剤耐性菌へのアプローチを他職種間で演習を通じて考える	10月23日(土) 14:00~17:00	同時配信	塚本 容子(本学教授) 野田 久美子(本学助教)
【メンタルヘルス：ストレス】 目標：ストレスの脳内機構と精神疾患に関する最新の知見を学び、医療従事者が抱えるメンタルヘルスにおける問題点とその対応策を考える。			
第1回：ストレスと脳 -ストレス脆弱性から"心の病"を考える-	10月19日(火) 19:00~20:30	同時配信	富樫 廣子(本学教授)
第2回：医療従事者が抱えるメンタルヘルスの問題の現状と理解 -その対応策を考える-	10月30日(土) 14:00~17:00	同時配信	坂野 雄二(本学教授)
第3回：医療従事者が抱えるメンタルヘルスの問題の現状と理解 -その対応策を考える-			
第4回：うつ病を引き起こすストレスの正体とは？	11月2日(火) 19:00~20:30	同時配信	阿保 順子(長野県看護大学学長)
【がん：緩和ケア】 目標：がんに関する最新の治療と緩和ケアに関する知識、情報収集方法を学習する。また、症状緩和に関連した患者教育について演習を通して学習する。			
第1回：がん治療に関する最新の知識とその情報収集方法	10月26日(火) 19:00~20:30	同時配信	小林 正伸(本学教授)
第2回：緩和ケア(症状緩和の知識)	11月9日(火) 19:00~20:30	同時配信	川村 三希子(本学教授)
第3回：情報検索の実践<演習>			久原 幸(手稲溪仁会病院)
第4回：疼痛緩和のバリアと患者教育 事例検討<演習>	11月27日(土) 14:00~17:00	同時配信	川村 三希子(本学教授)

●平成22年プログラム受講生および修了者

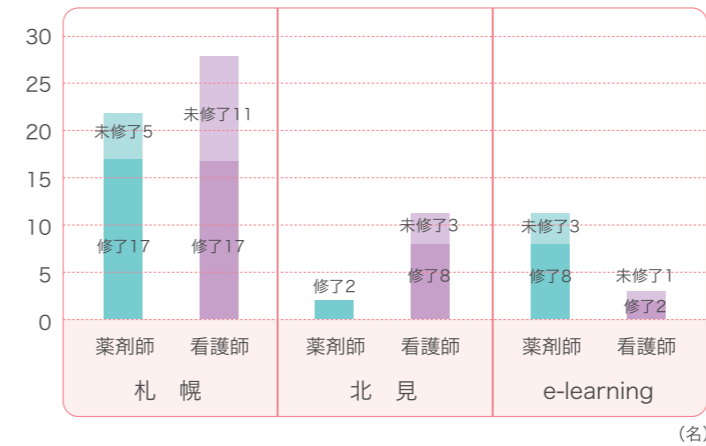
	職種	受講生	未修了者	修了率	
札幌会場	薬剤師	22	17	77.3%	
	看護師	28	17	60.7%	
北見会場	薬剤師	2	2	100.0%	
	看護師	10	8	80.0%	
e-learning	(札幌)	(薬剤師)	(7)	(5)	(71.4%)
		(看護師)	(1)	(1)	(100.0%)
	(北見)	(薬剤師)	(4)	(3)	(75.0%)
		(看護師)	(2)	(1)	(50.0%)
	合計	薬剤師	11	8	72.7%
		看護師	3	2	66.7%
総計	薬剤師	35	27	77.1%	
	看護師	41	27	65.9%	

(名)

●地域別に見た受講者数



●平成22年プログラム受講結果



	薬剤師	看護師	総計
札幌市	21	23	44
小樽市	—	1	1
江別市	1	1	2
小計	22	25	47
室蘭市	1	—	1
伊達市	—	1	1
小計	1	1	2
函館市	1	1	2
小計	1	1	2
旭川市	1	—	1
留萌市	2	—	2
赤市平	—	1	1
砂川市	—	1	1
小計	3	2	5
稚内市	1	—	1
小計	1	0	1
北見市	4	4	8
網走市	1	5	6
美幌町	—	1	1
中標津町	1	—	1
小計	6	10	16
釧路市	—	1	1
帯広市	1	—	1
釧路市	—	1	1
小計	1	2	3
総計	35	41	76

(名)

●受講証・修了証



共通基礎プログラム コンピュータスキル向上プログラム

概要 医療情報入手に必要な不可欠なコンピュータの基礎、患者教育に必要なプレゼンテーションソフトの使用方法を学習する。

回	日時	講義テーマ / 講師	受講者数
第1回	6月1日(火) 北見会場 6月5日(土) 13:00~17:00	19:00 ~20:30 コンピュータ操作の基礎	● 対面受講者数 / 50名 ● e-learning / 26名
第2回	6月12日(土)	14:00 ~15:30 インターネットの基礎	● 対面受講者数 / 45名 ● e-learning / 31名
第3回	北見会場 6月5日(土) 13:00~17:00	15:30 ~17:00 プレゼンテーションの作成	● 対面受講者数 / 44名 ● e-learning / 32名

本プログラムでは、昨年度と同様に、コンピュータ操作の基礎、インターネットの基礎、プレゼンテーションの作成の3つをテーマとしたプログラムを実施した。プログラムはすべて演習形式で行い、コンピュータを実際に操作しながらリテラシー技術の向上を図った。

コンピュータ操作の基礎では、情報検索や文献検索において、収集した情報を管理するうえで重要となる基盤技術の習得を図った。具体的には、収集したテキストデータを定型的な文書を効率的に変換するためのスキルとしてテンプレートを活用する方法を学べるようにした。配布資料に関しては、昨年度とは構成を変更して、課題形式のテキスト構成とした。これにより、e-Learning となるDVD受講生がステップバイステップ方式でより具体的に技術を習得できるようにした。

インターネットの基礎では、インターネットを用いた情報検索に必要な基礎的な技術の習得を目指した。具体的には、まず、インターネットの仕組みを理解し、世界規模のネットワーク内に

種々のデータベースが構築されていることを紹介した。また、情報検索のポータルサイトを利用して、情報の検索・管理・再利用の方法などの一連の情報検索に関する演習を行った。

プレゼンテーションの作成では、患者教育に必要なプレゼンテーションスキルを習得することを目的とした。具体的には、まず、プレゼンテーション技法の基礎として、発表内容を視覚的にわかりやすくするためのスライドの構成方法と、発表の組み立てなどについて紹介した。次に、伝達内容を論理的に伝えるためのアウトラインのデザイン方法を理解してもらい、伝達内容を視覚的に表現するためのSmart Artを使ったスライド作りができるようにした。さらに、アニメーションによる強調表現などを使い、ダイナミックなプレゼンテーションを作成するための技術の習得を図った。

以上のコンピュータを使った演習では、本年度もスタッフのサポートを仰ぐことができ、受講生一人一人の疑問や質問に答え、きめ細かな対応をすることができた。



第1回 コンピュータ操作の基礎

● 学習目標

情報の取得・管理に必要なコンピュータリテラシーを習得する科目である。本講では、主として、定型的な文書を制作するためのテンプレートの利用と作成方法や、各種のデータを視覚的に集計するための表計算の方法を学ぶための演習を中心に進める。

● 講師

二瓶 裕之
(北海道医療大学准教授)

第2回 インターネットの基礎

● 学習目標

インターネットを用いた情報取得に必要なコンピュータスキルを習得する科目である。本講では、主として、インターネットで公開されている種々の情報検索サービスを利用して、情報の検索・管理・再利用の方法などの一連の情報検索に関する演習を中心に進める。

● 講師

二瓶 裕之
(北海道医療大学准教授)

第3回 プレゼンテーションの作成

● 学習目標

患者教育に必要なプレゼンテーションスキルを習得する科目である。本講では、主として、伝達内容を論理的に伝えるためのデザイン方法や、伝達内容を視覚的に表現するためのSmart Artの活用方法、および、アニメーションによる強調表現などに関する演習を中心に進める。

● 講師

二瓶 裕之
(北海道医療大学准教授)

講師略歴

二瓶 裕之
(にへい ひろゆき)

- 最終学歴 北海道大学大学院工学研究科博士課程電子工学専攻単位取得退学、博士(工学)
- 職歴 東北職業能力開発大学校附属青森職業能力開発短期大学校にて助教として情報科学、データ構造・アルゴリズム、画像処理、ソフトウェア設計実習を担当。五所川原市立高等看護学院非常勤講師の兼任などを経て、北海道医療大学就任。
- 現職 北海道医療大学薬学部 人間基礎科学講座(情報科学) 准教授
- 専門研究分野 情報科学、光・量子エレクトロニクス



共通基礎プログラム 情報検索スキル向上プログラム

【概要】 医療情報入手のためのデータベースを用いた情報検索方法を学習する。

回	日時	講義テーマ／講師	受講者数
第1回	6月26日(土)	14:00 ～15:30	データベースアクセスの基礎 ● 対面受講者数 / 42名 ● e-learning / 34名
第2回		15:30 ～17:00	医療情報検索の基礎—演習— ● 対面受講者数 / 43名 ● e-learning / 33名
第3回	7月3日(土)	14:00 ～15:30	薬剤情報検索の基礎—講義と演習— ● 対面受講者数 / 42名 ● e-learning / 34名
第4回		15:30 ～17:00	薬剤情報検索の基礎—講義と演習— ● 対面受講者数 / 40名 ● e-learning / 36名

本プログラムでは、データベースアクセスの基礎、医療情報検索の基礎、薬剤情報検索の基礎の3つをテーマとした講義・演習により、各自パソコンを実際に操作しながら情報検索の知識・技術向上と、専門的な薬剤情報検索に関する最新の知識を習得することを目的とした。

第1回目のデータベースアクセスの基礎では、図書館で情報提供サービスを担当している司書(ヘルスサイエンス情報専門員)より、文献とは何か、論文の構成、一次資料と二次資料の関係、および学術情報のフローについて把握することを目的に講義を展開した。

第2回目の医療情報検索の基礎・演習では、受講者自身が国内医学文献データベースの医中誌Web、JDreamII、CINAHLを活用した検索を行い、キーワード・シソーラス用語による検索方法、検索結果の違い、および収録データの違いなど

把握することを目的に演習形式で行い、検索を行う上で必要とする知識・技術を習得した。

第3回、第4回日の薬剤情報検索の基礎—講義・演習では、薬学部において実務系薬学教育を担当している教員より、インターネット上の薬剤師が有用とする情報を入手し、適切に患者へ情報提供ができるように、具体的な例題に基づき、医薬品医療機器総合機構や製薬企業のホームページで提供している画像などを活用した情報収集法やその活用術について解説した。

実践的な検索事例に基づく講義と演習、また図書館員による受講者への個別サポート対応は、受講者の学習向上に繋がった。

第1回 データベースへのアクセスの基礎

●学習目標

臨床現場で必要とする医薬品情報や看護情報などを収集するための図書館活用術を学ぶ。また、医中誌Web、J DreamII、MEDLINE、Pub Med、CINAHL等、文献情報データベースの特徴、および具体的テーマに基づく検索の進め方を習得すると共に、文献の質を見分けるためのデータベース活用術について理解する。

●講師

平 紀子
(北海道医療大学学務部次長:
ヘルスサイエンス情報専門員上級)

第2回 医療情報検索の基礎

●学習目標

文献とは何か、臨床現場でなぜ文献情報を必要とするのかを考える。学術論文の構成、キーワード、シソーラスについて理解すると共に、演習において各種データベースへのアクセス方法、検索のコツ、検索結果データの見方、書誌情報などについて理解する。

●講師

平 紀子
(北海道医療大学学務部次長:
ヘルスサイエンス情報専門員上級)

第3・4回 薬剤情報検索の基礎—講義と演習—

●学習目標

インターネットを介して薬剤に関連する情報を入手し、適切に患者あるいは医療従事者に提供できるようになるために、例題に基づいて収集すべき情報を確定し、医薬品医療機器総合機構や製薬企業各社のホームページから電子媒体の情報を収集し、相手のニーズを満足させる資料を作成するための情報加工技術の基礎を習得する。なお、本講義は各自パソコンを利用しながらインターネット上より適切な情報収集を演習形式で行う予定である。

●講師

小林 道也
(北海道医療大学准教授)

講師略歴

平 紀子
(たいら のりこ)

- 最終学歴 北海道大学大学院教育学研究科博士課程修了 博士(教育学)
- 現職 北海道医療大学総合図書館(学務部次長)、NPO日本医学図書館協会理事(教育・研究)、日本薬学図書館協議会理事(教育・研究)
- 資格 図書館司書、図書館司書教諭、ヘルスサイエンス情報専門員(上級資格)
- 専門研究分野 図書館情報学、医療情報学

小林 道也
(こばやし みちや)

- 最終学歴 北海道大学大学院薬学研究科 修士課程修了、博士(薬学)
- 職歴 北海道大学医学部附属病院薬剤部にて薬剤師として勤務。医薬品情報室長、試験研究室長を経て、2001年より北海道医療大学就任。
- 現職 北海道医療大学薬学部 実務薬学教育研究講座 准教授
- 専門研究分野 生物薬剤学(医薬品の吸収、排泄)、臨床薬学(医薬品情報学、薬剤疫学)

共通基礎プログラム 情報の質評価スキル向上プログラム

【概要】 医療情報入手のためのデータベースを用いた情報検索方法を学習する。

回	日時	講義テーマ／講師	受講者数
第1回	7月13日(火) 19:00～20:30	地域における臨床研究の基礎	● 対面受講者数 / 41名 ● e-learning / 35名
第2回	7月31日(土)	エビデンスに基づいた医療提供とは何か	● 対面受講者数 / 44名 ● e-learning / 32名
第3回		文献クリティークの基礎	● 対面受講者数 / 43名 ● e-learning / 33名

本プログラムでは、「地域における臨床研究の基礎」、「エビデンスに基づいた医療提供とは何か」、「文献クリティークの基礎」における3つのテーマとして学んだ。

第1回目「地域における臨床研究の基礎」では、地域医療に携わる医師である担当講師により、現場の実践的な取り組み状況や課題について紹介した。アクションリサーチと呼ばれる我が国で未開発分野であること、地域における保健情報ニーズ把握の重要性について解説した。また、これらの取り組みのために研究論文を批判的に読み質の高い情報を入手することが重要である一方でEBMガイドラインの限界について触れた。

第2回目「エビデンスに基づいた医療提供とは何か」では、地域医療学総合医学講座において総合診療に携わる医師である担当講師より行われた。臨床研究とは何か、臨床上の問題をクリニカルクエスチョンへ変換するための方法について解説すると共に、地域ケアにおける情報の重要性について強調した。また、EBM4段階、臨床上の疑問の定式化、情報収集、情報の

批判的吟味、自分の患者への適用について、具体的なモデルを示した。

第3回目「文献クリティークの基礎」では、EBMの復習を行った後、臨床上の疑問をEBMで解決するための手順と臨床問題の解決に用いる代表的な二次資料としてUpToDate、DynaMedの特徴について解説すると共に、具体的なテーマに基づき検索を行った。

講義を通じ、研究のクリニカルクエスチョンの考え方、日常業務の中で研究に取り組むことの重要性や研究のヒントなどを習得することができた。また、EBMやPECOの学び直しを実際の症例に基づき展開され、受講生にとって有用な学び直しの機会を得ることができた。

第1回 地域における臨床研究の基礎

●学習目標

地域医療において重要な位置を占めるプライマリ・ケアについて認識を深める。プライマリ・ケアには質的研究と量的研究がある。質的研究は比較的容易に取り組めるが、分析方法については習熟する必要がある。基本となる方法について修得する。

●講師

前沢 政次
(北海道大学名誉教授)

第2回 エビデンスに基づいた医療提供とは何か？

●学習目標

本講義では、科学的根拠を探して実践するEBMについて学習する。特に最新の「最新情報の探し方」をマスターすることを目標とする。「情報入手の4S」(Systems, Synopses, Syntheses, Studies)に従って情報の入手法を修得する。以上の修得を促すために、具体的な症例を用いて実習をする。

●講師

山本 和利
(札幌医科大学教授)

第3・4回 文献クリティークの基礎

●学習目標

1. EBMの4つのステップ

Step1 臨床上の疑問の定式化 Step2 情報収集

Step3 情報の批判的吟味 Step4 自分の患者への適用

を理解する。

2. 信頼性の高い二次資料(UpToDate、DynaMed)を使えるようになる。

●講師

山本 和利
(札幌医科大学教授)

講師略歴

前沢 政次
(まえざわ まさじ)

● 生 年	1947年
● 最終学歴	1971年3月新潟大学医学卒業、2008年北海道大学大学院教育学修士課程修了
● 職 歴	1971年 国立東京第一病院内科研修 1974年 自治医科大学内科 1980年 大分県立療養所三重病院副院長 1981年 自治医科大学地域医療学講師 1984年 自治医科大学地域医療学助教授 1988年 宮城県涌谷町町民医療福祉センター所長、涌谷町国保病院長 1996年 北海道大学病院総合診療部教授 2002年 北海道大学医学部医学教育開発室長兼任 2005年 北海道大学大学院医学研究科教授
● 現 職	2010年 JA北海道厚生連俱知安厚生病院 医師、北海道大学 名誉教授
● 専門研究分野	地域医療学、医療教育学

山本 和利
(やまもと わり)

● 最終学歴	自治医科大学医学部
● 職 歴	1978年4月静岡県立中央病院研修医(スーパーローテート) 1991年4月自治医科大学総合医学第一講座(講師) 1994年9月京都大学医学部付属病院総合診療部(講師) 1999年2月札幌医科大学医学部地域医療総合医学講座(教授) 2010年7月現在に至る
● 現 職	札幌医科大学地域医療総合医学講座 教授
● 専門研究分野	総合診療、糖尿病学、臨床疫学

共通基礎プログラム 患者教育スキル向上プログラム

【概要】 入手した質の高い医療情報をもとに患者教育を行うことのできる能力を学習する。

回	日時	講義テーマ / 講師	受講者数
第1回	8月7日(土) 14:00 ~15:30	患者の声が医療を変えはじめた!	●対面受講者数 / 34名 ●e-learning / 42名
第2回	8月10日(火) 19:00 ~20:30	慢性疾患を持つ人のセルフケア能力を高める看護支援	●対面受講者数 / 36名 ●e-learning / 40名
第3回	8月28日(土) 14:00 ~15:30	医療とコミュニケーション	●対面受講者数 / 32名 ●e-learning / 44名

本プログラムでは「患者の声が医療を変えはじめた」、「慢性疾患を持つ人のセルフケア能力を高める看護支援」、「医療とコミュニケーション」をテーマに、患者教育を行うために必要な情報、コミュニケーションのための知識・技術の習得を図った。

第1回「患者の声が医療を変えはじめた」は大熊由紀子氏を講師に招き、一般市民にも開放した公開講座として開催された。医療・福祉分野における数々の提言、現場と政策をつなぐ活動を行っている大熊由紀子氏の講演に、札幌会場およびライブ配信された北見会場(日本赤十字北海道看護大学)の本プログラム受講生、一般市民が熱心に耳を傾けた。

第2回「慢性疾患を持つ人のセルフケア能力を高める看護支援」は看護大学に在職する講師が、セルフケア能力が着目される背景を歴史的に解説し、セルフケア能力の概念の定義、構成概念を踏まえ、セルフケア能力を高める看護支援を習得した。講師が作成した日本の慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を捉える指標SCAQ(Self-Care Agency Questionnaire)作成

のプロセス、セルフケア能力を高める支援から患者教育に必要な知識を習得した。

第3回目は、「医療とコミュニケーション」というテーマで、光工学の權威で紫綬褒章受章者でもある朝倉利光先生にご講演いただいた。講演では、人類の歴史を、火の利用に始まるエネルギー技術の流れと、言葉と文字の発明に始まる情報技術の流れとして概観し、20世紀に起こる情報革命の背景が詳細に解説された。続いて、情報の意味と医療情報とは何かということが、理論的に説明され、最後に、情報化が進展するなかで、看護を中心とする医療分野におけるコミュニケーションの役割と重要性が具体的に解説された。深い学識に基づいたご講演に、多くの聴衆が感銘を受けた。

共通基礎プログラム終了後、受講者と講師による懇談会を開催し、専門共通プログラムに移行する前のコミュニケーションの場となった。

第1回 患者の声が医療を変えはじめた!

●学習目標

「ボランティア」「インフォームド・コンセント」「ノーマライゼーション」この3つのキーワードの共通点を探る中で、保健、医療、福祉現場の専門職に不可欠な「ケア」の考え方をつかむ。あわせて、患者・家族・市民とのコミュニケーションのスキルを学ぶ。

●講師

大熊 由紀子
(国際医療福祉大学教授)

平成22年度「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム」の共通基礎プログラム(全13回)の11回目は、大熊由紀子氏を講師に招き、一般市民にも開放した公開講座として開催されました(平成22年6月)。医療・福祉分野における数々の提言、現場と政策をつなぐ活動と実績で知られる大熊由紀子氏のお話に、札幌会場、ライブ配信された北見会場(日本赤十字北海道看護大学)で本プログラム受講生、一般市民が熱心に耳を傾けました。ここでは、講演の要旨をご紹介します。

やさしき挑戦者同士のえにしを結ぶ

「国際医療福祉大学大学院の公開講義をまとめた『患者の声を医療に生かす』という本を、本日の講演タイトルに頂きました。この講義は患者さんや障がいのある方が教壇に、医療スタッフとそのタマゴたちが聞き手となって行われたもので、患者さんが医療の専門家に講義するデンマークの“でんぐり返しプロジェクト”をヒントに始めた講義でした。

ご紹介いただいた肩書の他に、“福祉と医療、現場と政策をつなぐ志の縁結び係&小間使い”を名乗っております。ホームページ『ゆきえにしネット』<http://www.yuki-enishi.com/>と年1度の『えにしを結ぶ会』で、様々な方の縁を結ぶ機会を作っています。ご覧のスライドにもお子様が突然亡くした経験がある方、薬害エイズ原告団団長、中医協委員になった高校の物理の先生、福祉に力をいれたら医療費が減った実績をもつ村長さん、事務次官、福祉用具アドバイザーまで、普通なら知り合えない方々が一緒に写っています。自ら苦しんだ経験を役立てて同じ経験をもつ方をボランティアで支える自死遺族、2万人に1人というアルビノ(先天性白皮症)に悩んだ経験を生かした若者など“やさしき挑戦者”がたくさん集まります。」

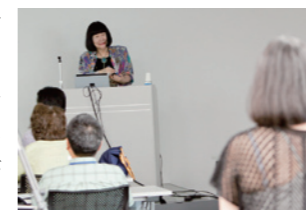
「患者の声」を生かすために策定され、成立した2つの法律

「『患者の声を医療に生かされた』日本ではおそらく最初の法律が、2006年に成立したがん対策基本法、自殺対策基本法です。山本孝史参議院議員(当時)が専門家だけでなく癌を体験したご本人や家族の声を政策に生かそうとつくりあげた法律です。政策作りのさなかに山本議員はご自分が末期がんで余命半年と知りますが、本会議でがんを告白、自ら患者としての生の声を届け、成立となったものでした。」

誤解されやすい「ボランティア」「インフォームド・コンセント」

「“ボランティア”は無料サービス、“インフォームド・コンセント”は医者が説明して患者さんが判を押すことと誤って理解されることが多いようです。

“ボランティア”の語源『volo』は『喜んで～する』『志す』の意味をもつラテン語で命令形はありません。法律・制度で強制されない、想像力がないと自己満足だけで相手を不幸にするなど、ボランティアは恋に似ています。大阪大学時代には客員きょうじゅ大阪ボランティア協会の早瀬昇さんに「ボランティアは、ほっとかれへん、がまんしてけへんこと」と教わりました。



“インフォームド・コンセント”は十分な情報を手に入れた患者さんが治療方針や検査を選択するプロセスのことです。日本での第一人者、唄孝一先生は海外の文献で『インフォームド・コンセントとは、患者にオーソライズされていない治療』とこの概念に触れてカルチャーショックを受け、日本での普及に尽力されました。」

インフォームド・コンセント普及と患者の知る権利の歩み

「1988年には、慶應義塾大学病院の近藤誠先生が『知らせることは治療の入り口』と、がん患者全てに病気を知らせることを始めました。それまで信じられていた常識と違い、自殺者も死期を早めた人もいず、患者、家族、医師の風通しがよくなり治療効果が高まりました。

インフォームド・コンセントという言葉が知られていなかった1990年、朝日新聞で、『病気を知って、病気とつきあう』とタイトルでシンポジウムを開催しました。治すための、また治らない場合は残る人生の計画を立てるためのインフォームド・コンセント、臨床試験の医師と患者の関係のように連帯のためのインフォームド・コンセントについて話し合われました。『自分がエイズだと知りたくない権もある』という主張、それに対して『人に感染させてしまう。だから知る義務がある』といった論争もありました。

それから7年後、『カルテ等の活用に関する検討会』に私は委員として参加しました。患者がカルテを見る権利の法令化が提言されました。ところが、審議会で逆転され、カルテ開示は不可能かと思われました。しかし2005年に個人情報保護法ができ、意外な展開となりました。第25条に、本人が求めた場合は情報を開示しなければならぬと定められたのです。

2008年に外添厚労大臣(当時)が国会答弁で、患者が請求しなくても、全員に検査、治療、薬の情報がわかる明細書付き領収書を渡すことを約束しました。このときは、国立の病院だけだったのですが、2010年にはコンピュータ管理されている医療機関に義務化されています。

患者の知る権利を巡る一連の流れの大きなきっかけになったのは、1人の遺族、勝村久司さんです。順調な妊娠期間を過ごしていた奥様が、病院の指示で入院した翌日生死をさまよい、星子ちゃんと名付けた赤ちゃんが生後まもなく亡くなった理由を知りたいと動きました。苦勞して突き止めた原因は、ひとによって感受性に200倍の差がある、危険な陣痛促進剤でした。自然であるべきお産の時間を、病院の都合で平日の午後に合わせるために陣痛促進剤が使われる、これが実情です。」

医療従事者への期待 虫・鳥・歴史、3つの目を

「医療従事者であるみなさんには、虫の目、鳥の目、歴史の目をもってほしいと思います。私は新聞社で科学部にいたため、医学

や技術にばかり目をとられ、“寝たきり老人”についても、世話を楽にするための技術、機器の開発に注目する若い記者の原稿をそのまま載せていました。ヨーロッパの国々を訪ね『寝たきり老人』という日常語が日本にしかないことを発見し、『なぜ?』と考え続き『寝たきり老人』のいる国いない国(ぶどう社)という本を書き、その第1章。介護保険のメニューになりました。

日本では、いわゆる老人病院や特別養護老人ホームの雑居部屋に『寝かせきり』にされていました。現場でよくよく見る、これが『虫の目』です。

『鳥の目』は視野を広げること。日本の高齢化には手本がないと言われてきましたが、世界には日本より先に高齢化した国がたくさんあります。その経験を生かすことができる日本は幸運な国です。

たとえば、デンマークに行きました。病院での治療後に自宅には戻れない人が過ごすプライエムがありました。個室には自宅から運んだ家具が置いてあり温かい雰囲気でした。しかし、デンマークでは1987年に、『キッチンがついていない。居間と寝室がつながっている、これは普通の暮らしではない』と、ケア付き共同住宅へと政策転換しています。

『歴史の目』で見ると、たとえばスウェーデンには日本の療養型に似た雑居、寝かせきりの時代がありました。そこを『エーデル改革』で住まいにする大改革が行われたのです。」

デンマークに学ぶこと 介護保険のベースに

「高齢者福祉ではスウェーデンよりデンマークが進んでいます。その源は、1982年にロスキレ大学教授アンデルセン氏が中心になって打ち出した『高齢者医療福祉政策3原則』にあるようです。1つ目は、どんなに立派な老人ホームでも人里離れ、思い出が周りにない場所で過ごすのは幸せではない。人生は継続しなければならぬという『人生の継続性の尊重』。2つ目は暮らす場所を自ら決める『自己決定の尊重』、3つ目は右半身が動かなくても左半身は動かせる、首から下が動かなくなっても首から上は活用で



きるという見方、『自己資源(残存能力)活用』です。後にアンデルセン氏は厚生大臣となり、日本との差もどんどん広がっていききました。

デンマークの在宅ケアでは生活の節目節目にホームヘルパーが現れ、おむつをしていてもおしゃれもでき、外出もできます。日本のように長男の嫁によるアマチュアの介護に頼るのではなく、プロのヘルパー、訪問ナース、家庭医、住宅改善、適切な補助器具の提供で、寝たきりにならず普通に暮らせるシステムを支えています。

これらは日本の介護保険のメニューになりました。法律が動きだすまでには、『嫁が親をみるという日本の美風を壊す』という政治家の反対論も根強く大変でした。日本の介護保険はその名前からドイツを手本にしたと錯覚している人がおおいのですが、サービスの内容も、市町村により横出し上乘せができるなど、実は北欧をモデルにつくられました。このプロセスは『物語・介護保険のちの尊厳のための70のドラマ』でご紹介しましたので、どうぞ読んでください。

1人あたりの医療費と満足度の調査で、日本はデンマークと同じくらいのお金をかけているのに満足度はかなり低いという結果が出ています。システムの面から見直す必要があると思います。」

エーバルト・クローさんの 世直し7原則

「今日は世の中をよくしたいと思っている方の集まりですから、最後にクローさんの『世直し7原則』をお伝えします。

クローさんは、気の合うヘルパーを自分で選び採用できるデンマークのオーフス方式の仕掛け人です。ヨーロッパ筋ジストロフィー協会会長で、日本であれば病院や施設から一生出られないような重介護を必要とする方ですが、ヘルパーさんと共に補助器具の大荷物に従えて来日され講演してくださいました。環境がととのえばどんな状態の人でも適切な補助機器、介助者があれば海外旅行もでき、社会のリーダーとなり得ます。そんな社会をみなさんと一緒にめざしていきたいと思います。」

【クローさんの世直し7原則】

- ・愚痴や泣き言で世の中は変えられない
- ・従来の発想を創造的にひっくり返す
- ・説得力あるデータに基づく提言を
- ・市町村の競争心をあおる
- ・メディア、行政、政治家に仲間を作る
- ・名を捨てて実を取る
- ・提言はユーモアにつつまで

第3回 医療とコミュニケーション

●学習目標

人類は社会を形成する上で、エネルギーの利用と意思伝達的手段(コミュニケーション)として言葉、文字など(情報)を発明した。エネルギー利用にもとづく科学技術は発展してきたが、情報にかかわる科学技術は大幅に遅れた。近年、後者の著しい発展として“情報革命”が起こり、情報社会が進展・整備されつつある。情報革命で医療の世界も影響を受け、医療のさまざまな分野で大きな変化・進展が生じている。ここでは“情報とは、コミュニケーションとは”を正確に認識し、看護を中心とする医療分野におけるコミュニケーションの役割と重要性について紹介する。

●講師

朝倉 利光
(北海学園大学学長)

共通基礎プログラムの最終回(第13回)は、北海学園大学学長・朝倉利光氏による特別講演「医療とコミュニケーション」を一般市民も参加できる特別公開講座として開催しました(平成22年8月)。朝倉氏は光工学がご専門ですが、北海道大学では長年にわたり看護師養成に、また、ご自身の研究の応用の1つとして医療機器開発に携わってきた経験をお持ちです。

医療の世界も情報社会の急速な進展に大きな影響を受けていることから、“情報とは”“コミュニケーションとは”という基本を正確に認識できるよう構成されたお話しに、本プログラム受講生、一般市民が熱心に聞き入りました。ここでは、講演の要旨をご紹介します。

“情報”の歴史をひもとく 2大発明、エネルギー利用と言葉

「今日は大きく5つお話しします。1つ目で情報社会の成り立ちまでの歴史を振り返り、2つ目でふだん何気なく使う言葉“情報”“コミュニケーション”とは何かを改めて確認します。3つ目は、社会、人間の体における情報の流れ、4つ目は医療におけるコミュニケーションについて、最後に将来の展望をお話しします。

まず、歴史です。人類は社会形成のために2大発明をしました。1つはエネルギーの利用です。火の利用、その延長線上に太陽を利用した農業が生まれ、狩猟中心の生活から定住へと変わりました。2大発明のうち1つはコミュニケーションのための言葉、定住に伴って子孫に伝えたいと発明された文字です。この2大発明が文化をもつ集団社会の誕生を可能にしました。」

エネルギー、情報、医療 ルネッサンス以前の歴史

「“エネルギー”の利用は農業に始まり、技術も生まれました。しかし中世までは人間が自然について考える“自然哲学”であり、まだ“科学”ではありませんでした。

“情報”の歴史では、最初に象形文字が、ギリシャ時代にアルファベットが生まれます。1400年代後半に印刷機が発明され、文字のコピーが可能となりました。

“医療”を見ると、人類は寄生虫病、伝染病、飢饉に何の手だても持たず、長らく医学と呼べるものはありませんでした。中世に入るとペストの大流行があり、修道院がその患者のケアを行うようになり都市型医療の原型が生まれました。」

ルネッサンス期の科学革命 エネルギーの機械化が進展

「ルネッサンス期には“自然哲学”から自然を観察し、法則をみつ けようとする“科学”へと大きく転換します。これが科学革命、

ガリレオ、ニュートンの時代です。続いて科学を人間のために利用する、蒸気機関車に代表される産業革命が起こりました。その流れは、蒸気機関車から自動車へとように、集団のための利用から個人の利用へと変わり、大量生産が必要となって資本主義が生まれます。この科学革命、産業革命、資本主義の3つを背景に“近代科学”は発展しました。

近代科学には3つの特色があります。1つは『砂漠の思考』と呼ばれ、自然は人間に敵対するものという捉え方をする西洋の論理です。対して東洋は『森林の思考』、自然は愛するものと捉えます。ですから“科学”は生まれません。残り2つは、科学優先型、エネルギー革命です。近代科学は全てエネルギー利用を基に1850年頃まで続きました。しかし、日本は鎖国により近代科学の発展には一切関与していないといえます。」

遅れて始まった情報の機械化 しかし、情報科学は医療の世界にも

「エネルギーの機械化が進む一方、情報の機械化はほとんど進みませんでした。産業革命に写真機が、1800年頃には映写機と蓄音機が登場しますが、情報の機械化を大きく進展させたのは第二次世界大戦です。善し悪しは別として、戦争は科学技術を大幅に進歩させます。

第二次世界大戦を境に近代科学は技術を組み合わせる利用し、システムティック、効率的に思考する技術優先型の現代科学へと進展します。ここで組織だてて行うものづくりが得意な日本は一気に世界に追いつきました。

さらに、エネルギー科学は情報科学へとシフトしていききました。医療では、産業革命で労働者が増えた頃、過労、貧困、結核が大きな問題となり公衆衛生の必要性が認識されます。

日本は、第二次世界大戦終結と共にそれまでのドイツ医学からアメリカ医学へとシフトし、抗生物質も多種入ってきました。あらゆる分野で情報の機械化が進む中、情報科学はサービス

第2回 慢性疾患を持つ人のセルフケア能力を高める看護支援

●学習目標

慢性疾患をもつ人のセルフケアを行う力、すなわちセルフケア能力を高める看護支援について、学習する。目標は、以下の内容を学ぶことである。

- (1)セルフケア能力が着目される背景
- (2)セルフケア能力の定義と構成要素
- (3)セルフケア能力を高める看護支援

●講師

本庄 恵子
(日本赤十字看護大学准教授)

産業にまで及ぶのかどうかは疑問視されていました。しかし、ご存じの通りサービス産業の代表格・医療にも情報革命は大きく影響しています。診断を例にとっても、いまは画像を基に行われます。医師は画像を見て、判断する役割となっています。」

情報革命の歴史 エジソンからシャノンまで

「情報革命の元祖はろう管レコード発明で初めて言葉を記録したトーマス・A・エジソン(1847-1931)です。その後、4人の科学者が情報を科学にしました。

まずノバート・ウィナー (1894-1964)が、動物も機械も同じ通信と制御のシステムでできているとし、『人間機械論』を発表しました。次にデニス・ガボール(1900-1979)が“見る”情報、光が情報を運ぶことに注目してホログラフィー発明で三次元情報の記録・再生に成功しました。ノーベル物理学賞を受賞しています。続くジョン・フォン・ノイマン(1903-1957)が初のプログラム内蔵式コンピュータを作り、コンピュータ時代の扉を開きました。4人目は『機械は考えることができるか』の質問に『できる。私も君も機械じゃないか』と答えたクロード・E・シャノン(1916-2001)で、情報を科学の対象とし、全てを0と1で表すデジタル信号を導入しました。」

情報とは何か？ コミュニケーションとは何か？

「“情報”とは『事象を写し取った記号』です。人間対事象の関係でのみ存在します。その記号を伝えるのが“コミュニケーション”です。どんな情報も数値化、記号化できます。シャノンの考えに則り情報を科学として扱うには主観的なことはすべてカットされます。

情報は確率ともいえます。情報の増加→不確かさの減少→予想の当たる確率の増加、この考えで第二次世界大戦中には暗号解読が発達しました。確率であれば定量化が可能で、長さや重さに単位があるように情報にも基本単位があります。それが“ビット”です。」

人間の体の情報、エネルギーの流れ

「人間の体には情報が絶えず流れています。目は光センサー、レンズ、脳は光メモリ、光コンピュータ、神経系が光情報伝送路(光ファイバー)です。同時にエネルギーの流れもあります。心臓が光源にあたり、血管系が光エネルギー伝達路、光ファイバーです。人間の体はエネルギーの機械化、情報の機械化により成り立っているのです。人間は5感で獲得した情報を脳に送り、脳が処理をして適切な運動をする指示を出します。人間の体はコミュニケーションの原点ともいえるのです。

感覚(情報獲得)→脳→運動(移動)→感覚…という情報ループで成り立っている人間の体は、高齢になるとループのどこかに障がいがあります。それをいかに代行するかが課題です。

人間同士のコミュニケーションを見ると、フェイス・ツー・フェイスの他に、電話など通信機器を介した人間機械系コミュニケーション、そしてコンピュータネットワーク系があります。全てに共通するのはメッセージが記号化されてやり取りされる点です。」

対人関係は医療の原点 看護の役割は大きい

「医療では情報のやり取りが全ての出発点です。なかでも人間を人間らしく生活できるよう支える看護の役割は非常に重要です。身体的な病をもつと7割が精神的な病になるといわれます。看護の場面ではそれを忘れないでください。日々進歩する医療の知識や技術を学ぶことは大切ですが、コミュニケーション技術がなくてはどうにもなりません。もちろん、情熱も必要です。

患者と医師には意識の違いがあります。患者は医師が病を治してくれる、その義務があるものと思っています。治せるか治せないか、オール・オア・ナッシングです。しかし、現実には不確実性があります。このギャップを埋めるのが言語・非言語によるコミュニケーションで、ここでも看護師は大きな役割を果たします。

高齢化社会における医療の現場には、患者を“個人”として捉え、それぞれの豊かな人生を支援するために欠かせないことがあります。それは、加齢による病、障がいや補うという発想、日常生活の延長線上に病や障がいがあるという認識に変えていくことです。」



電子カルテ導入など 医療の現場でも進む情報化

「厚労省は患者への情報提供、医療の質向上・効率化、さらに安全対策のため医療の情報化に力を入れています。鍵を握るのは電子カルテです。患者への数々のメリットが期待されます。

医療情報システムは、『医療施設の情報化』『医療施設のネットワーク化』『医療情報の有効利用』『根拠に基づく医療支援』の4段階で展開されます。現在、最初の『医療施設の情報化』が盛んに行われているのはご存じの通りです。」

コミュニケーションで 豊かな人間社会の構築を

「高齢化社会での情報の利用には社会全体を考える視点が必要です。情報・コミュニケーションは人間関係の基本であり、医療においてはコミュニケーションがそれぞれの豊かな人生の支援を可能にします。

加齢に伴う身体的欠陥がどのように、どの方向に向かって起こるか、先ほどの情報ループに問題が起きたときにどう対応すべきか、老人学的な蓄積はほとんどありません。一口に高齢者といってもそれぞれが個人であり、個々に対応しようとすることは産業にもつながります。少量多品種生産が必要となり中小企業が元気になるでしょう。こう考える背景には『ジェロントロジー』という概念があります。医学、心理学、社会学などを統合した総合的なもので、加齢を退行ではなく前向きに捉える学問です。私は『老人学』と呼び、健康な老人とはどうあるべきか、そのための社会のインフラ、システムのあり方を考えることに取り組み始めました。今後はこの分野でも積極的に情報を利用していきたいと思っています。」

講師略歴

大熊 由紀子 (おおくま ゆきこ) 東京大学教養学科で科学史と科学哲学を専攻したのち、科学・医学記者を目指して朝日新聞社に入社。科学部次長を経て1984年論説委員。2001年までの17年間、主に医療、福祉、科学、技術分野の社説を担当。著書に『「寝たきり老人」のいる国いない国－真の豊かさへの挑戦』(ぶどう社)、最新刊は『物語・介護保険・上・下巻』(岩波書店)。

- 2001～2004 大阪大学大学院人間科学研究科教授(ボランティア人間科学講座ソーシャルサービス論)
- 2004～ 国際医療福祉大学大学院教授(医療福祉ジャーナリズム)、千葉県参与(福祉健康政策担当)

本庄 恵子 (ほんじょう けいこ) ●生 年 1967年
●最 終 学 歴 日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士後期課程満期退学、博士(看護学)学位取得
●職 歴 都内の総合病院で看護師として勤務。日本赤十字看護大学看護学部講師、同大学院看護学研究科講師、同大学看護学部および同大学院看護学研究科の助教授を経て同大学看護学部および同大学院看護学研究科准教授(現職)
●現 職 日本赤十字看護大学看護学部准教授、同大学院看護学研究科准教授
●専門研究分野 慢性疾患をもつ人の看護、セルフケア能力を高める看護支援

朝倉 利光 (あさくら としみつ) ●生 年 1934年
●最 終 学 歴 ボストン大学大学院物理学専攻修士課程、MA(物理学)工学博士(東京大学)、名誉博士(フィンランド、ヨエンスー大学)
●職 歴 ボストン大学物理学研究所研究助手、アイテック・コーポレーション情報技術研究所研究員、東京大学生産技術研究所助手、北海道大学工学部助教授、北海道大学応用電気研究所教授、東京工業大学理工学国際交流センター教授(併任)、北海道大学電子科学研究所教授・所長、北海学園大学工学部教授
●現 職 北海学園大学長、北海道大学名誉教授
●専門研究分野 光物理学・光工学の基礎研究と計測・情報処理・医工学・文化遺産探査等の広範囲な領域における応用研究

専門分野別プログラム 生活習慣病：糖尿病

【概要】 糖尿病に関する最新の医学的知識、そして最新の情報収集方法を学習する。また、患者教育について演習を通して学習する。

回	日時	講義テーマ / 講師	受講者数
第1回	9月7日(火) 19:00~20:30	糖尿病に関する最新の医学的知識とその情報収集方法	●対面受講者数 / 15名 (うち聴講生 / 3名) ●e-learning / 5名
第2回	9月28日(火) 19:00~20:30	地域における医療情報の集積と糖尿病の予防と治療	●対面受講者数 / 13名 (うち聴講生 / 3名) ●e-learning / 7名
第3回	10月16日(土)	14:00~15:30 情報検索演習	●対面受講者数 / 18名 ●e-learning / 4名
第4回		15:30~17:00 患者教育演習	●対面受講者数 / 19名 ●e-learning / 4名

今年度の生活習慣病専門分野では、糖尿病を取り上げ、講義および演習を取り入れてプログラムを構成した。

第1回目では、糖尿病に関する国内外の大規模介入研究の結果など、最新の医学的知識が講義された。また、歯周病と動脈硬化関連疾患との関連についての研究実践や知見が紹介され、歯学と医学の双方からのアプローチが重要であることが示された。実際の糖尿病に関する疑問から、丁寧に情報を集め、疑問を解決していくことの重要性を確認する機会となった。

第2回目では、医療情報学とその発展の現状が講義された。医療情報を活用した地域的な取り組みとして、北海道情報大学医療情報センターが展開している「食を基盤にした健康都市づくり」が紹介された。医療情報を、中核病院と地域の診療所と共有することや病院と研究機関と共有することにより、

ネットワークを形成し、地域医療に役立てていく方法などが示された。

第3回目では、実際にパソコン操作を行いながら、情報検索について演習した。糖尿病に関連する用語をキーワードに挙げながら、検索方法や結果を確認していくことができた。キーワードの選択方法やシソーラスの活用方法、絞り込み検索などの情報検索方法について学習した。情報検索を継続的に実施して重要性が確認された。

第4回目では、糖尿病患者との相談・教育的支援の際の、基本姿勢や面接技法、試演のポイントを学習した。さらに、受講生が体験している糖尿病患者との相談・教育場面を活用し、グループワークにより支援方法を検討した。看護師・薬剤師ともに糖尿病患者に支援を行っているが、両者のコミュニケーションや実際の場面を振り返る機会となった。

第1回 糖尿病に関する最新の医学的知識とその情報収集方法

●学習目標

糖尿病などの生活習慣病に関する最新の医学的知識をいかにして収集するか、実際に演者が実行している方法を紹介する。また、実際のテーマをサンプルに実践方法をシミュレートしてみる。

●講師

辻 昌宏
(北海道医療大学教授)

第2回 地域における医療情報の集積と糖尿病の予防と治療

●学習目標

生活習慣病の主な原因として、「過食と運動不足」が挙げられるが、これらの原因には地域における食習慣、産業基盤、情報基盤などの生活環境が大きく影響すると考えられる。従って、食事療法や運動療法を計画する場合、地域住民の取り巻く生活環境を考慮した方策を立てなければならない。しかしながら、必ずしもこれらの指導により十分な成果が得られず、肥満、糖尿病、高血圧、高脂血症に対する薬物療法を行うケースが多い。本講義では、地域における医療情報を基盤にした生活習慣病の予防、特に「食と疾患」との関連から学習する。

●講師

西平 順
(北海道情報大学教授)

第3回 情報検索演習

●学習目標

「医療情報検索の基礎」で学んだ知識と検索技術を基にして、より高度で具体的な検索を行ないます。データベースは医中誌、JDream、PubMedを使用します。様々な例題を使って検索演習することによって、基礎から中級レベルの文献検索技術を習得することを目標とします。

●講師

諏訪部 直子
(ヘルスサイエンス情報専門員上級)

第4回 患者教育演習

●学習目標

演習を通して、メタボリックシンドロームや生活習慣病に罹患した人々への行動変容を可能にする患者教育の方法を学習する。本講を学習することにより、これまで学習した医療情報の収集から対象者への提供までの流れを理解する。受講者のこれまでの患者教育の経験を振り返り、今後の患者教育に活用可能なスキルを身につける。

●講師

桑原 ゆみ
(北海道医療大学准教授)

講師略歴

辻 昌宏 (つじ まさひろ)
 ●最終学歴 秋田大学医学部卒、博士(医学)
 ●職歴 北海道大学医学部第一内科、北海道社会保険病院 同病院内科主任部長を経て、2003年より北海道医療大学就任
 ●現職 北海道医療大学個体差医療科学センター教授、北海道医療大学病院病院長、学校法人東日本学園理事・評議員
 ●専門研究分野 脂質代謝異常・糖尿病・動脈硬化・老年医学・肥満

西平 順 (にしひら じゅん)
 ●生年 1953年
 ●最終学歴 北海道大学医学部 博士(医学)
 ●職歴 横須賀米海軍病院インターン、北海道大学医学部内科学第二講座医員、生化学第二講座研究員を経て米国ノースカロライナ州ウェークフォレスト大学附属ボウマングレー医学部にリサーチフェローとして留学。帰国後、北海道大学大学院医学研究科助手、同大学医学研究科助教授を経て2006年から現職
 ●現職 北海道情報大学経営情報学部 医療情報学科 教授
 ●専門分野 医療情報学、内科学(免疫、代謝)、分子生物学

諏訪部 直子 (すわべ なおこ)
 ●生年 1967年
 ●最終学歴 図書館情報大学図書館情報学部図書館情報学科卒業 学士
 ●職歴 平成元年 杏林大学医学図書館 司書
 レファレンスサービス、データベース利用教育等に従事
 ●現職 杏林大学医学図書館司書課次長、NPO法人日本医学図書館協会 教育・研究委員会委員長、ヘルスサイエンス情報専門員(上級資格)
 ●専門研究分野 健康情報の評価・利用

桑原 ゆみ (くわばら ゆみ)
 ●最終学歴 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士課程修了 修士(看護学)
 ●職歴 千葉大学附属病院に勤務後、北海道医療大学就任
 ●現職 北海道医療大学看護福祉学部看護学科 地域保健看護学講座 准教授
 ●専門研究分野 地域看護学、生活習慣病予防のための看護支援とその評価

専門分野別プログラム 感染症：抗菌薬の適正使用

概要 近年医療施設で問題となっている多剤耐性菌についての発生機序、それを予防するための抗菌薬の適正使用、そして発生した際の対応に関する最新知識を講義、演習を通して学習する。

回	日時	講義テーマ / 講師	受講者数
第1回	9月14日(火) 19:00~20:30	多剤耐性菌発生時の拡大予防 ー環境汚染に焦点を当ててー	●対面受講者数 / 14名 (うち聴講生 / 6名) ●e-learning / 5名
第2回	10月5日(火) 19:00~20:30	抗菌薬使用耐性サーベイランス	●対面受講者数 / 11名 (うち聴講生 / 5名) ●e-learning / 5名
第3回	10月23日(土) 14:00~15:30	情報検索演習	●対面受講者数 / 10名 ●e-learning / 4名
第4回	10月23日(土) 15:30~17:00	多剤耐性菌の事例検討：医療施設での多剤耐性菌へのアプローチを他職種間で演習を通じて考える	●対面受講者数 / 10名 ●e-learning / 4名

今年度は多剤耐性菌対策に焦点を当て、感染症についての講義・演習を行った。この専門分野別プログラム実施直前に、アシネトバクターによる多剤耐性菌の問題が全国的に問題となり、本プログラムは受講生に対しタイムリーに必要な知識を提供できたのではないかと考えている。第1回目、2回目の講義では、薬剤耐性菌の基礎的知識、臨床現場における対応、薬剤耐性サーベイランスなどの知識を提供した。第1回目では、アシネトバクターによる感染症に特に焦点を当てて、その発生機序、感染のリスク要因、感染対策として環境清掃の重要性そしてどのような環境消毒を行ったらよいのか、ということについての講義であった。第2回目は、国内で問題となっている耐性菌とそれらの問題点、耐性菌発生のメカニズム、抗菌薬使用状況・耐性菌発生状況のサーベイランスについての内容であった。第3回目、4回目は、演習を中心に行われた。第3回目の講義は、耐性菌に関する情報を文献検索できることを目的としており、基本的な検索方法からキーワードの設定

方法について具体的に学習した。実際にデータベースを用いて、演習形式で進めていった。その検索内容を基に第4回目では、得られた内容をパワーポイントを用いてグループで発表する形式で行った。札幌会場で2グループ、北見会場で1グループを作り、①多剤耐性アシネトバクターの定義、②感染のリスク、③看護師、薬剤師、それぞれの立場からの対応、以上3点についてプレゼンテーションを行った。それぞれのグループ内では、薬剤師、看護師両方の職種の人がお互いの役割から発言が見られた。北見会場からも携帯電話を通じて札幌会場参加者へのプレゼンテーションも行われ、他のグループの発表を共有することで、違う視点が得られた、と参加者からもコメントをいただいている。医療施設内で役割の違う専門職が1つのチームとして活動していく中で、このように一緒に演習を行っていくことはとても有意義であったと思われる。



第1回 多剤耐性菌発生時の拡大予防 ー環境汚染に焦点を当ててー

●学習目標 多剤耐性菌のアウトブレイク時、患者周囲の環境汚染からの感染拡大の事例は数多く報告されている。それらの事例、そしてさまざまな研究から環境と多剤耐性菌の関連について検討し、適切な環境消毒についてそれぞれの施設に合った形での使用について考察できるようにする。

●講師 塚本 容子 (北海道医療大学教授)

第2回 抗菌薬使用耐性サーベイランス

●学習目標 抗菌薬使用耐性サーベイランスは、感染制御と抗菌薬使用の薬剤費削減という観点から、抗菌薬使用を管理するために重要なステップである。本講では、これらの抗菌薬管理プログラムや最近の話題を中心に紹介し、抗菌薬の適正使用について考えてみたい。

●講師 唯野 貢司 (北海道医療大学教授)

第3回 情報検索演習

●学習目標 「医療情報検索の基礎」で学んだ知識と検索技術を基にして、より高度で具体的な検索を行ないます。データベースは医中誌、JDream、PubMedを使用します。様々な例題を使って検索演習することによって、基礎から中級レベルの文献検索技術を習得することを目標とします。

●講師 河合 富士美 (ヘルスサイエンス情報専門員上級)

第4回 多剤耐性菌の事例検討：医療施設での多剤耐性菌へのアプローチを他職種間で演習を通じて考える

●学習目標 PBL (Problem based learning) 方式で、感染症を持つ患者に対しての適切な抗菌薬使用に関してグループ演習を行う。現在予定している疾患としては、呼吸器疾患及び尿路感染症を考えている。

●講師 唯野 貢司 (北海道医療大学教授)
塚本 容子 (北海道医療大学教授)
野田 久美子 (北海道医療大学助教)

講師略歴

塚本 容子 (つかもと ようこ)
●最終学歴 Stanford University, 博士課程(公衆衛生学)・University of South Carolinaにて看護学・公衆衛生学修士課程修了。
●職歴 University of California San Franciscoにてナースプラクティショナーとして勤務。その他HIV患者を中心に医療を提供。2005年。
●現職 北海道医療大学 看護福祉学部 教授
●専門研究分野 感染症・HIV・看護師の継続教育

唯野 貢司 (ただの こうじ)
●生年 1951年
●最終学歴 東北薬科大学大学院修士課程修了、薬学博士
●職歴 市立札幌病院薬局勤務、調剤係長、製剤係長、副薬局長、薬剤部長を経て北海道医療大学に赴任
●現職 北海道医療大学薬学部(実務薬学教育研究講座)教授
●主な資格など 日本医療薬学会認定指導薬剤師、ICD(インフォメーション・コントロール・データ制度協議会)、日本病院薬剤師会認定感染制御専門薬剤師
●専門研究分野 医療薬理学、TDM、感染制御全般(医療廃棄物、抗菌薬の適正使用)

河合 富士美 (かわい ふじみ)
●生年 1959年
●最終学歴 図書館短期大学図書館学科卒
●職歴 自治医科大学図書館に司書として採用、目録係、参考調査係を経て、昭和61年聖路加国際病院医学図書館勤務。
●現職 聖路加国際病院教育研究センター医学図書館チーフ。NPO法人日本医学図書館協会理事(組織・制度担当)、同診療ガイドラインワーキンググループ委員会委員長、ヘルスサイエンス情報専門員(上級資格)
●専門研究分野 EBIM

野田 久美子 (のだ くみこ)
●最終学歴 金沢大学大学院自然科学研究科生命薬学専攻博士前期課程修了、修士
●職歴 市立釧路総合病院にて勤務し、抗菌薬や腎移植時における免疫抑制剤のTDMに携わる。2008年4月北海道医療大学助教に就任。
●現職 北海道医療大学薬学部 実務薬学教育研究講座
●専門研究分野 臨床薬理学、TDM

専門分野別プログラム **メンタルヘルス：ストレス**

概要 ストレスの脳内機構と精神疾患に関する最新の知見を学び、医療従事者が抱えるメンタルヘルスにおける問題点とその対応策を考える。

回	日時	講義テーマ／講師	受講者数
第1回	10月19日(火) 19:00～20:30	ストレスと脳 —ストレスの脆弱性から‘心の病’を考える—	●対面受講者数／13名 (うち聴講生／1名) ●e-learning／11名
第2回	10月30日(火)	医療従事者が抱えるメンタルヘルスの問題の現状と理解 —その対応策を考える—	●対面受講者数／18名 (うち聴講生／1名)
第3回			●対面受講者数／17名 (うち聴講生／1名)
第4回	11月2日(火) 19:00～20:30	うつ病を引き起こすストレスの正体とは	●対面受講者数／16名 (うち聴講生／2名) ●e-learning／9名

本プログラムでは、ストレスと脳、メンタルヘルスの現状と理解、ストレスの正体の3つのテーマに着目して、ストレスの脳内機構と精神疾患に関する最新の知識を学べるようにした。

第1回目の「ストレスと脳」では、ストレスによって変化する脳という観点から、脳がストレスを受容する過程を理解して、ストレス性精神疾患の脳内メカニズムと治療の可能性に関して、最新の学説をもとに講義が展開された。実際の研究データなどのエビデンスをもとに新しい知見と視野が得られたとの受講生の声があった。

第2・3回目の「医療従事者が抱えるメンタルヘルスの問題の現状と理解」では、メンタルヘルスの重要性を理解したうえで、ストレスの要因やストレスによって引き起こされる疾患について講

義が展開された。また、うつ病とその対策方法、ならびに、身体疾患とうつ病との関連が講義され、医療従事者に対するストレスとその対策方法について学ぶことができた。受講生からは、本講義の内容が身近な問題であり、今後の患者さんへの対応へ応用できる内容であったとの評価が多かった。

第4回目の「うつ病を引き起こすストレスの正体とは」では、まず、年代ごとのうつ病の様相を学ぶことができた。また、現代的なうつ病の特徴について講義が展開され、うつ病が増加してきた背景などが解説された。最後には、現代的なうつ病の対処における心のマネジメントの重要性が講義された。受講生からは、うつ病の分類や本質を理解でき、新しいタイプのうつ病に対する知見を得られたとの声が多かった。

第1回 **ストレスと脳 —ストレスの脆弱性から“心の病”を考える—**

●学習目標

生体にはストレスに対応する多様な仕組みが備わっている。現代社会において問題となっている“心の病”には、ストレスに対する適応破綻、すなわち視床下部を最終共通経路とする脳内ストレス処理機構の異常が深く関わっており、ストレス脆弱性仮説が提唱されている。本講では、“ストレスによって変わる脳”という視点から、脳がストレスをどのように受容し処理していくのかを最新の知見を交えて概説し、ストレス性精神疾患の脳内メカニズムの理解と新たな治療の可能性を探る。

●講師

富樫 廣子
(北海道医療大学教授)

第2・3回

医療従事者が抱えるメンタルヘルスの問題の現状と理解 —その対応策を考える—

●学習目標

ストレスやうつ病など、勤労者のメンタルヘルスに関する問題はますます深刻なものとなっている。医療従事者であってもそれは例外ではない。患者さんの心身の健康を考える立場にいる医療従事者自身の心身の健康はどのようになっているのだろうか。本講では、医療従事者が抱えるメンタルヘルスの問題の現状を理解するとともに、医療従事者自身が自らの心身の健康問題を考える際の着眼点について臨床心理学(認知行動療法)の立場から考える。

●講師

坂野 雄二
(北海道医療大学教授)

第4回

うつ病を引き起こすストレスの正体とは？

●学習目標

現代社会において蔓延している、うつ病ないしは抑うつ状態の全体像を、近年数多く提出されている新型うつ病(未熟型うつ病やディスチミアうつ病など)の概念も含めて理解し、それらうつ病を引き起こすストレスと現代社会の時代精神との関連を考えてみる。

●講師

阿保 順子
(長野県看護大学学長)

講師略歴

富樫 廣子
(とがし ひろこ)

- 生 年 1948年
- 最終学 歴 北海道大学薬学部薬学科卒業
- 職 歴 1971年化合物安全性研究所研究員、1978年北海道大学医学部薬理学講座(現神経薬理)助手、1989年同講師、2000年同助教授を経て、2005年より現職
- 現 職 北海道医療大学薬学部薬理学講座(病態生理学)教授
- 専門研究分野 情動、認知機能障害の病態生理学と精神神経薬理学。医学博士

坂野 雄二
(さかの ゆうじ)

- 生 年 1951年
- 最終学 歴 筑波大学大学院博士課程心理学研究科中退、教育学博士
- 職 歴 千葉大学教育学部講師、助教授、早稲田大学人間科学部助教授、教授を経て現職
- 現 職 北海道医療大学心理科学部教授
- 専門研究分野 認知行動療法

阿保 順子
(あほ じゅんこ)

- 生 年 1949年
- 最終学 歴 弘前大学大学院人文科学研究科修士課程文化基礎論 修了(文学修士)
- 職 歴 病院看護師や看護専門学校教員を経て、1993年から北海道医療大学看護福祉学部教授。2010年より現職
- 現 職 長野県看護大学 学長
- 専門研究分野 精神看護学・認知症ケア・看護における身体論研究など

専門分野別プログラム **がん：緩和ケア**

概要 がんに関する最新の治療と緩和ケアに関する知識、情報収集方法を学習する。また、症状緩和に関連した患者教育について演習を通して学習する。

回	日時	講義テーマ / 講師	受講者数
第1回	10月26日(火) 19:00~20:30	がん治療に関する最新の知識とその情報収集方法	●対面受講者数 / 17名 (うち聴講生 / 1名) ●e-learning / 9名
第2回	11月9日(火) 19:00~20:30	緩和ケア ー症状緩和の知識ー	●対面受講者数 / 15名 (うち聴講生 / 1名) ●e-learning / 11名
第3回	11月27日(土)	14:00~15:30 情報検索の実際 ー演習ー	●対面受講者数 / 21名 (うち聴講生 / 1名)
第4回		15:30~17:00 疼痛緩和のバリアと患者教育	

第1回は「がんの最新情報へのアクセス」と題して、Google、PubMed、海外癌医療情報リファレンスにアクセスし、がん治療に関する最新情報を得るための文献検索テクニックが紹介された。さらに、最新医療情報、最新医学情報、最新がん情報、薬の総合情報を得るためのサイト、最新がん治療や医療過誤について勉強するためのサイト、癌治療学会のガイドライン、医療従事者が初期研修資料を入手するためには、などのそれぞれの目的にあった最良の情報サイトが紹介され、そのアクセス方法とテクニックについて学習した。

第2回は「症状緩和の知識」と題して、緩和ケアの概念、がん疼痛の特徴、痛みの包括的評価法、症状マネジメントの統合的アプローチなどについて学習し、末期がん患者に起きる疼痛の症状が患者の QOL に与える影響と患者のセルフケア能力を高めるためには多職種によるチームアプローチが重要であることが理解できた。

第3回は、日常遭遇する疑問や問題について、必要な情報を効率的かつ適切に入手し、これらを患者さんに正しくわかりやすく提供するために、緩和医療に関するガイドライン、がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン、医療者向け緩和ケア教育プログラムなどを入手する方法を学んだ。さらに関連学会、研究会、団体などのホームページおよび各大学・医療機関のホームページからの情報の入手方法について、実際にこれら

のサイトにアクセスし、検索を行った。続いて、「効果的な疼痛マネジメントを阻む障壁」について、医療専門家に関係する問題、患者に関する問題、健康管理システムに関する問題に分けて学習し、がん疼痛マネジメントにおける患者教育を行うことで痛みが緩和されることを理解した。

第4回は患者教育の演習として、「疼痛緩和のために麻薬を使いたくないという患者への教育」と題したグループワークを行った。まず、課題として麻薬の使用を躊躇する理由について臨床体験をもとに具体的に列挙した後、麻薬の使用が必要であることを患者が納得できるように指導するために必要とする知識やツールを収集した後、グループ発表と質疑応答を行った。特に発表会では白熱した討論が行われ、大変有効な専門プログラムであった。



第1回 **がん治療に関する最新の知識とその情報収集方法**

●学習目標

インターネットにて最新の医学情報(癌関係)を獲得する方法を習得する。

●講師

小林 正伸
(北海道医療大学教授)

第2回 **緩和ケア(症状緩和の知識)**

●学習目標

進行・終末期のがん患者におきる症状が患者のQOLに与える影響について理解する。本講義では、症状マネジメントのための統合的アプローチの枠組みから患者のセルフケア能力を高めるための多職種アプローチについて理解する。

●講師

川村 三希子
(北海道医療大学教授)

第3回 **情報検索の実際**

第4回 **疼痛緩和のバリアと患者教育 事例検討**

●学習目標

緩和ケア領域のガイドラインや、教育プログラムをはじめ、各種アセスメントツールおよび患者教育に関する情報を入手する。

本講義は、日常遭遇する疑問や問題について、必要な情報を効率的かつ適切に入手し、これらを患者さんに正しくわかりやすく提供する方法を学ぶことを目標とする。

●講師

川村 三希子
(北海道医療大学教授)

久原 幸
(手稲溪仁会病院)

講師略歴

小林 正伸 (こばやし まさのぶ)	●生 年	1953年1月3日
	●最 終 学 歴	北海道大学医学部
	●職 歴	北海道大学医学部付属癌研究施設助教授、北海道大学遺伝子病制御研究所准教授
	●現 職	北海道医療大学看護福祉学部教授
●専門研究分野	腫瘍学、血液内科学	
川村 三希子 (かわむら みきこ)	●生 年	1960年
	●最 終 学 歴	北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科 博士後期課程(看護学博士)
	●職 歴	北海道大学病院、医療法人東札幌病院緩和ケア病棟、訪問看護ステーション東札幌、札幌南青洲病院勤務などを経て、現職
	●現 職	北海道医療大学看護福祉学部 臨床看護学講座 教授
●専門研究分野	がん看護、緩和ケア	
久原 幸 (ひさはら こう)	●最 終 学 歴	北海道薬科大学 薬学部
	●職 歴	帯広厚生病院、東札幌病院を経て、2001年より手稲溪仁会病院 治験管理センターにてCRCおよびマネジャーとして治験業務に従事。2007年12月緩和ケアチームの立ち上げにかかわり、2008年4月より現職
	●現 職	手稲溪仁会病院 がん治療管理センター 緩和ケア室 マネジャー
	●主な資格・社会活動	緩和薬物療法認定薬剤師、日本臨床薬理学会認定CRC、日本医療薬学会認定薬剤師、日本緩和医療学会代議員、日本緩和医療薬学会評議員など(現在)
●専門研究分野	緩和医療、臨床薬	

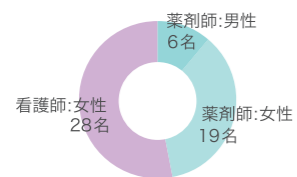


プログラム評価

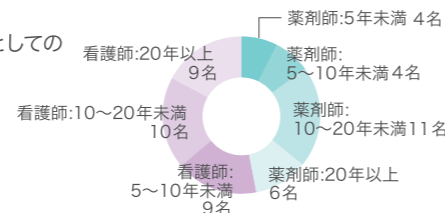
(1) 受講者アンケート

受講者プロフィール

●性別



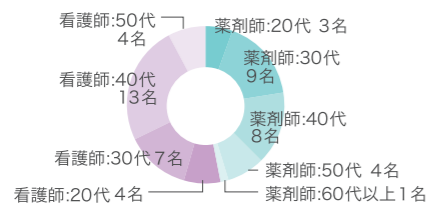
●薬剤師・看護師としての経験年数



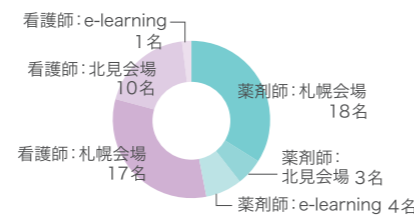
	薬剤師		看護師		総計	
男性	6名	11.3%	0名	0.0%	6名	11.3%
女性	19名	35.9%	28名	52.8%	47名	88.7%
総計	25名	47.2%	28名	52.8%	53名	100.0%

	薬剤師		看護師		総計	
5年未満	4名	7.5%	0名	0.0%	4名	7.5%
5~10年未満	4名	7.5%	9名	17.0%	13名	24.5%
10~20年未満	11名	20.7%	10名	18.9%	21名	39.6%
20年以上	6名	11.3%	9名	17.0%	15名	28.3%

●年齢



●受講会場/受講方法

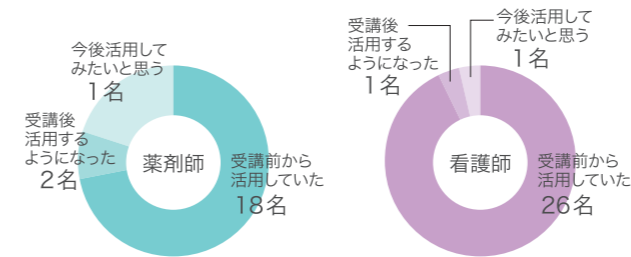


	薬剤師		看護師		総計	
20代	3名	5.7%	4名	7.5%	7名	13.2%
30代	9名	17.0%	7名	13.2%	16名	30.2%
40代	8名	15.1%	13名	24.5%	21名	39.6%
50代	4名	7.6%	4名	7.5%	8名	15.1%
60代以上	1名	1.9%	0名	0.0%	1名	1.9%

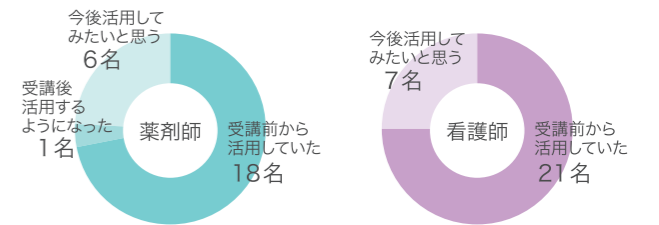
	薬剤師		看護師		総計	
札幌会場	18名	34.0%	17名	32.1%	35名	66.0%
北見会場	3名	5.6%	10名	18.9%	13名	24.5%
e-learning(DVD)	4名	7.5%	1名	1.9%	5名	9.4%

受講後アンケート

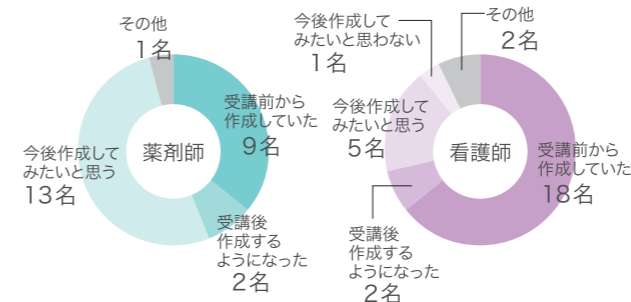
●wordを活用するようになりましたか



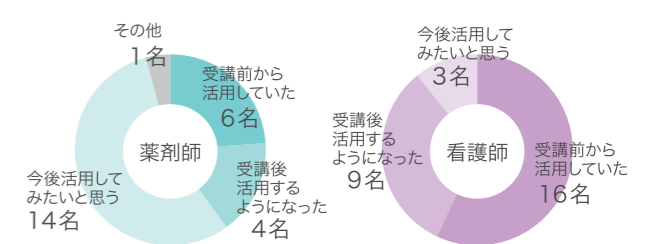
●Excelを活用するようになりましたか



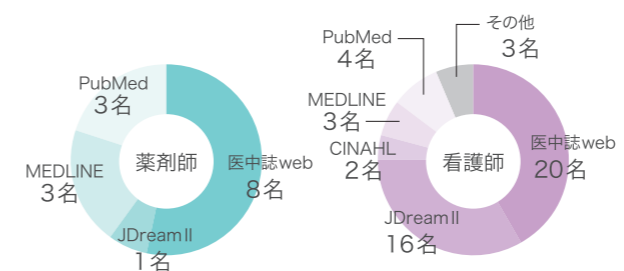
●院内(学会)発表や報告の為にプレゼンテーション資料を作成するようになりましたか



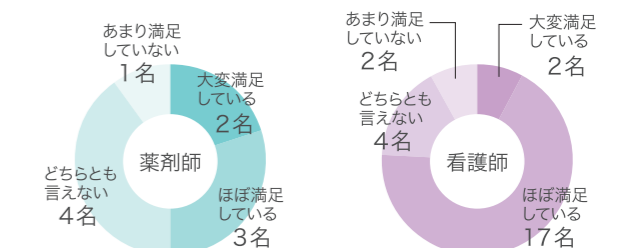
●文献情報検索(医中誌Web、JDreamII、MEDLINE、PubMed)を行ったことがありますか



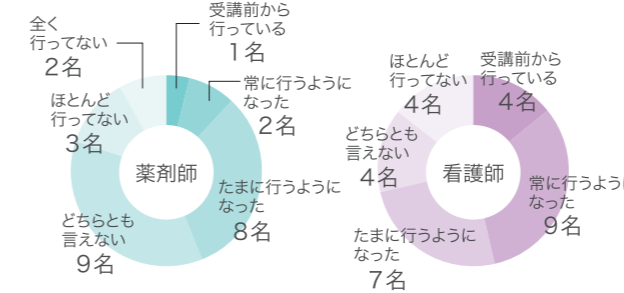
●文献情報検索をした事があると回答した方にお伺いします。検索経験があるデータベース名をお答えください



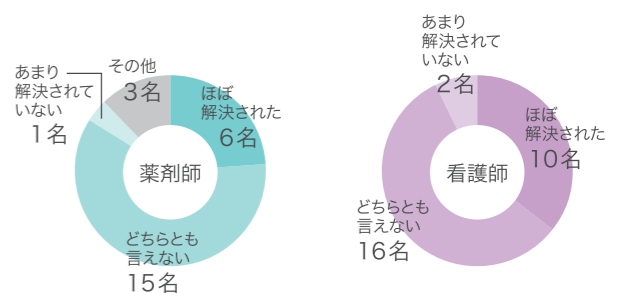
●検索を行った結果、入手した情報に満足していますか



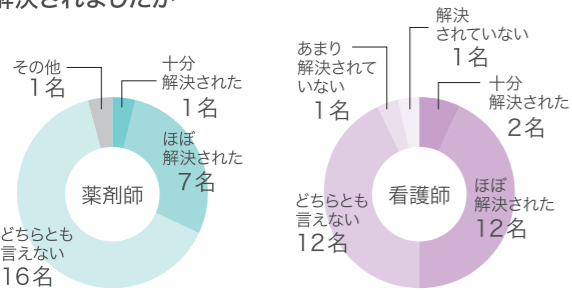
●研究論文を読む際に、その論文の論理性を意識して読み進めていますか



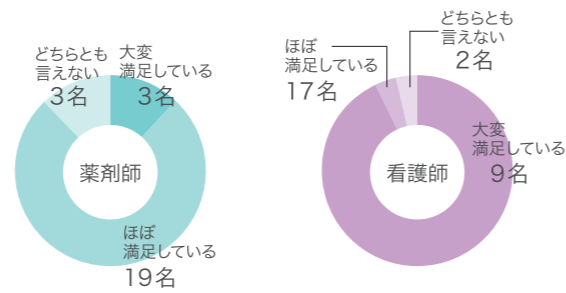
●研究論文を読む際に、その内容を評価する上で困っていた事が解決されましたか



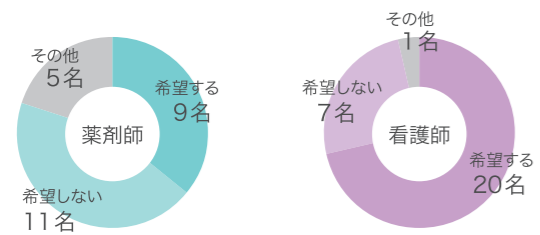
●患者教育を行う際に、困っていた事は解決されましたか



●プログラムの内容は満足できるものでしたか



●プログラム修了証と共に医療情報認定資格などの資格取得を希望されますか



●プログラムを終了した時点における感想や今後の要望

薬剤師

- 5ヶ月間ありがとうございました。学んだことを振り返りやすくなる展開が出来る場があると嬉しいのですが。
- インターネットなど使いきれていないと分かった事がよかったです。この問題を解決できるようにしたいと思った
- とても勉強になりました。ありがとうございました。
- プレゼンテーション資料は受講後より作成するようになった
- 今回家庭(仕事)の都合で十分e-learningを活用できず、課題も提出出来なかった。講義を受ける、受け続ける事の環境づくりを整え再度挑戦してみたいと思っている。学びたい=学べるではない事を今回思い知ったので次回受講時は今回の事を踏まえ取り組みたい。e-learningの1回目DVDは分かりにくかったように感じます。

- 実際の現場でリンクさせて実践するには時間を作り準備する時間が必要です。このプログラムは基本的なものの考え方についての再認識が出来たと思います。ありがとうございました。
- 長かったです。
- 日常の業務にすぐに役立つというよりは、より学術的な内容で最初はついていけるか心配だったが、何とか最後まで受講出来てほぼ満足している。パソコンはあまり得意ではないので良い練習機会を得たと思っています。今は拙いレポートにつきあって下さった講師の皆様に感謝しています。

看護師

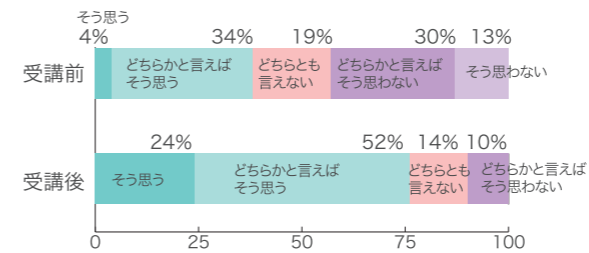
- パワーポイントなどバージョンの新しいものに更新していく事を忘れがちということに気づきました。専門分野別プログラム最終回、もう少し詳しく受講したかったです。時間の余裕があるとよかったですとおもいます。いただいた資料・参考文献、参考になりました。ありがとうございました。＊資格を取得する上での資料は見てみたいと思います。
- 今回学会発表のため11/27の専門コースには参加できなかったのですが、もし機会があればそういった資格取得についてどう学習を進めていったらよいか情報がほしいと思います
- 参加して大変な時もあったけれど、参加できてよかったと思います。楽しんで受講できました。
- 初めはなかなかついていけない印象を感じていましたが、後半になり、必要性を感じながら受講することができました。今後活用していきます
- 初参加でしたが、とても勉強になりました
- 専門や最新の情報を知れた講義内容は有意義であったが、講演会の内容などは抽象的なものが多く、何を言わんとしていたものかよくわからなかった(抽象的なテーマより、具体的や専門的なテーマの方が興味があります)

- 専門分野プログラムの講義は有意義でした。共通基礎プログラムも含めてですが、テーマが難解なものがあったついていけなかったものもありました。
- 2年目でしたがよかったです。お世話になりました。ありがとうございました
- 平日の夜に講義があると、仕事の兼ね合いで出席できなくなる事が、残念でした。(常日動での勤務形態ですが、残業が急に発生する事があるため)
- 北見会場でも直接講義を受けられる機会があればより学習効果が高まったと思います。今回より専門的な講義を受けられた事をとても感謝しております。ありがとうございました。今後も継続していただけたらいいなと思います
- 毎回資料を準備してくださり、学習環境が整っていてよかったです。自治体HPで働いているため、臨床と少しかけ離れていると感じる講義もありましたが、今後に活かせたらよいと思いました。ありがとうございました

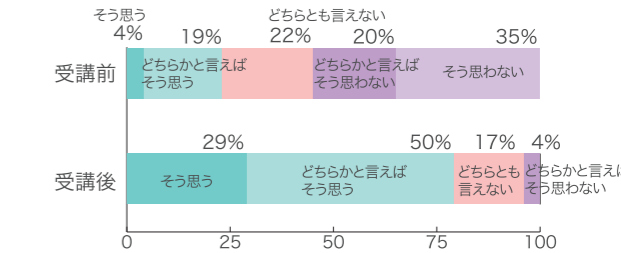
(2) 受講前後の自己評価結果

受講前後の比較

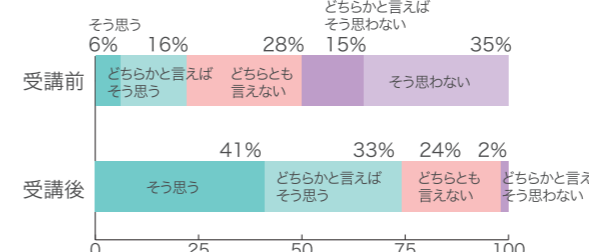
●コンピュータでできる事とその可能性に関して説明できる



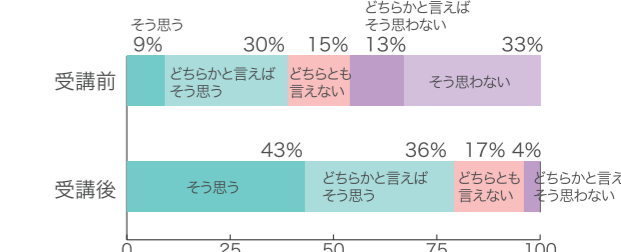
●定型文書におけるテンプレートの役割を説明できる



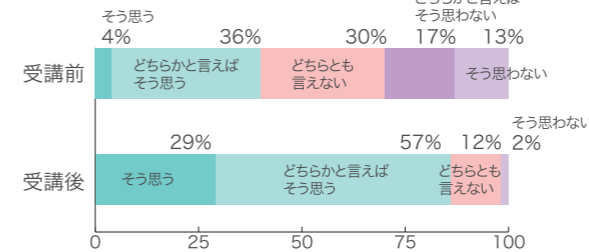
●定型文書における見出しの設定ができる



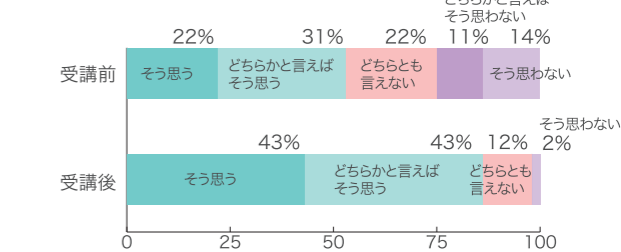
●定型文書における表紙・ヘッター・フッターを設定できる



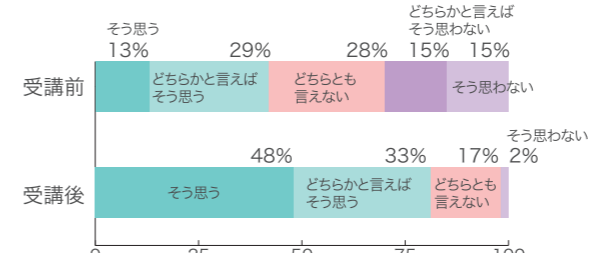
●インターネットの仕組みについての基本的な知識がある



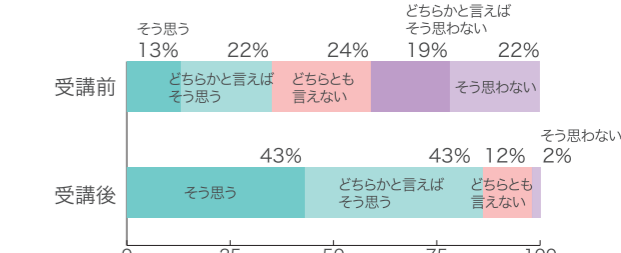
●検索ポータルサイトのサービスを利用できる



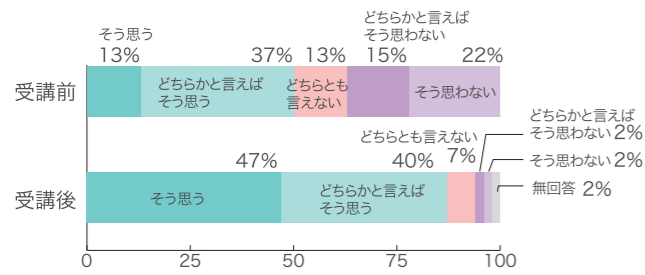
●情報機器による検索サービスを利用できる



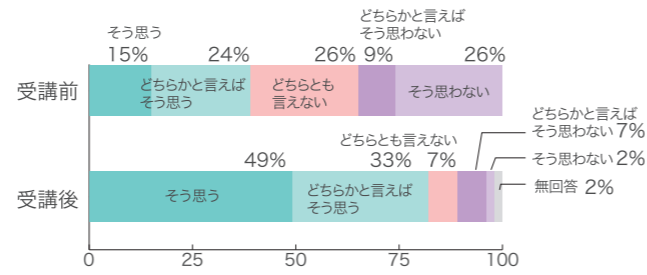
●Web電子百科事典を利用できる



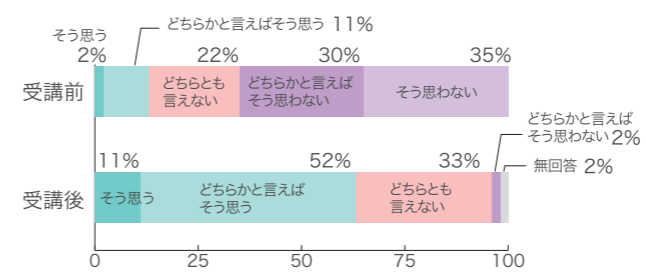
● テンプレートを利用してスライドを作れる



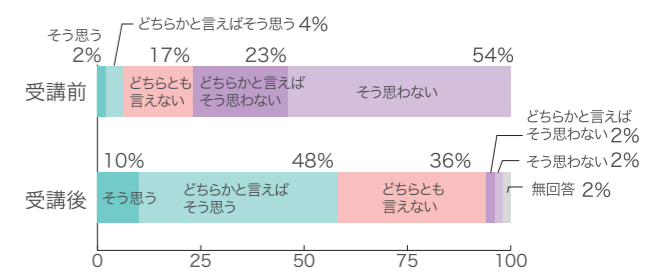
● 図形や写真(クリップアート)を利用してスライドを作れる



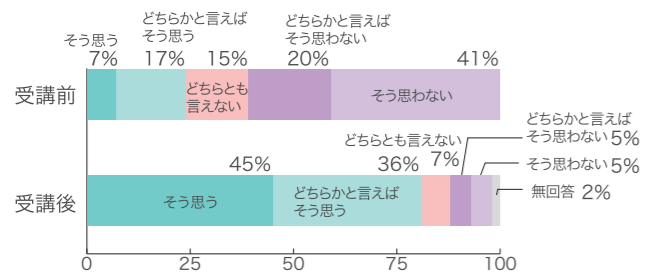
● 論文とは何か、およびその構成について説明できる



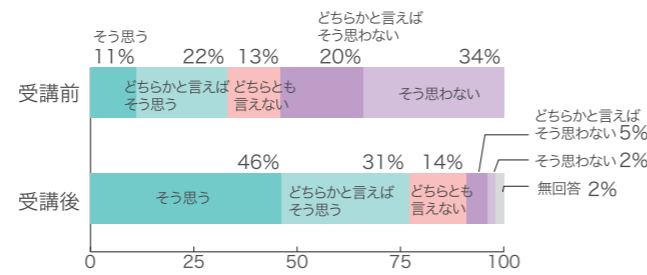
● 一次資料、二次資料、および書誌事項について説明できる



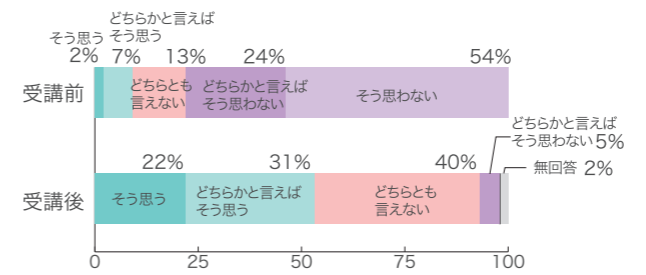
● 概念図(スマートアート)を利用してスライドを作れる



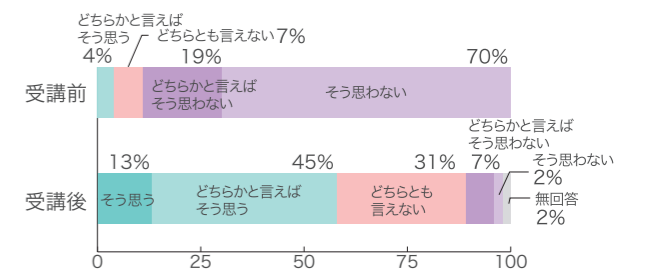
● アニメーションを利用してスライドを作れる



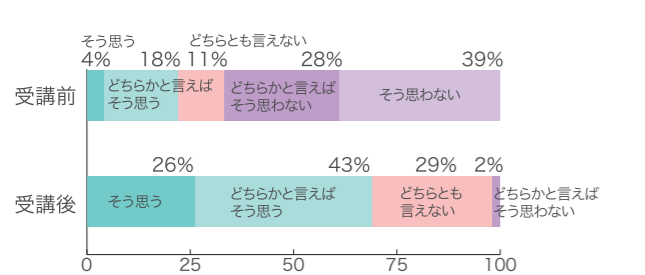
● 演算子(AND/ORなど)を利用して、検索式を組み立てることができる



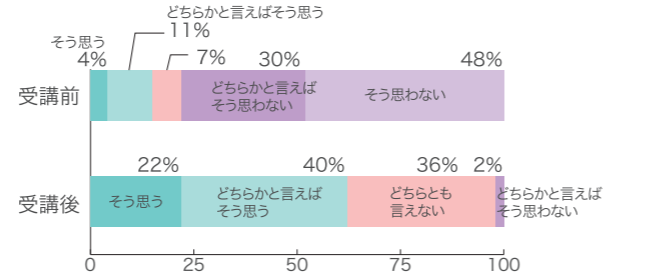
● キーワード(自由語)とシソーラス(統制語)の違いを説明できる



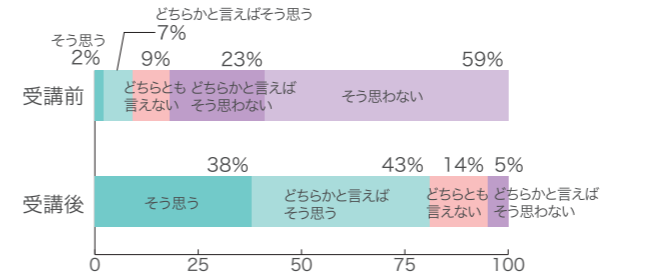
● 医中誌webがもつ特徴を理解し、検索ができる



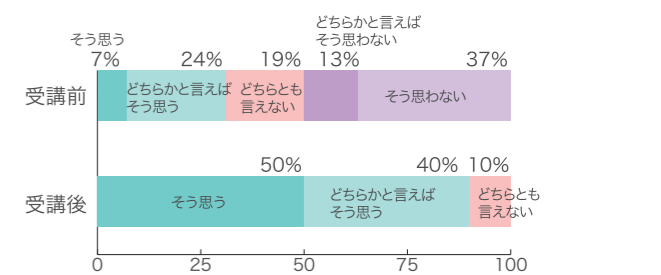
● JDreamII (JMEDPlus) がもつ特徴を理解し、検索ができる



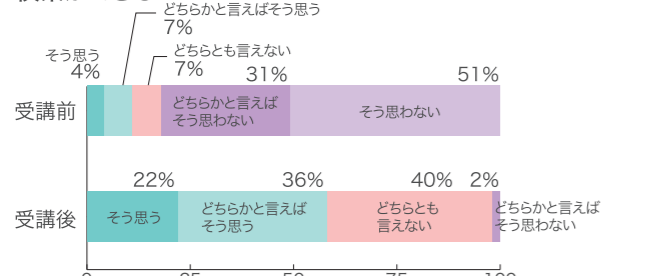
● (独) 医薬品医療機器総合機構のホームページより得られる薬剤情報を列挙できる



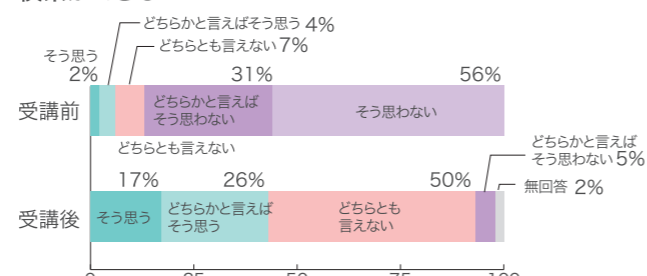
● 製薬企業や行政機関などのホームページより薬剤に関する情報を得られる



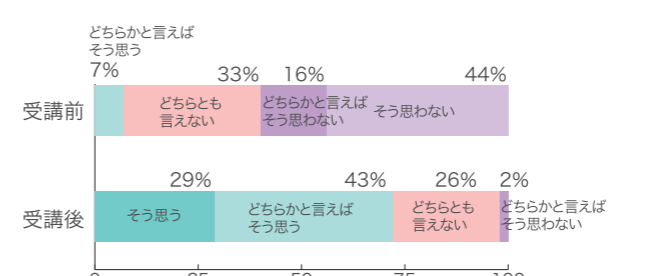
● MEDLINE (PubMed) がもつ特徴を理解し、検索ができる



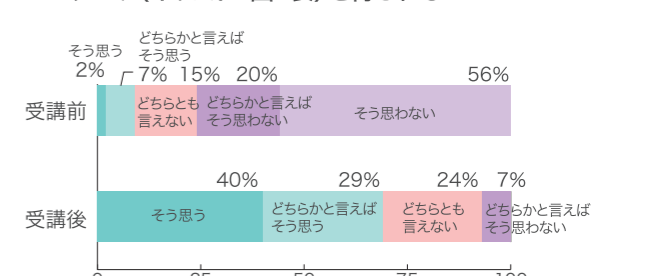
● CINAHL がもつ特徴を理解し、検索ができる



● インターネット上から得た薬剤情報を適切に評価できる



● 著作権などに配慮して、薬剤情報提供に有用なコンテンツ(イラスト・図・表)を得られる





プロジェクトコアメンバーによる 打ち合わせ

『地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム』打合せ

第1回

- 日時 2010年5月14日(金)15:00～
- 場所 図書館館長執務室

出席者

- ・田隈図書館長(事業担当者)
- ・豊田教授
- ・二瓶准教授
- ・平学務部次長(事業事務担当者)
- ・四釜職員、照本職員(事務局)

議題

- 平成22年度プログラム受講申込状況について
 - ・受講者の確定 (札幌会場・北見会場・e-learning)
 - ・専門分野別プログラムの聴講について
- 公開講座について
- 各プログラムのコーディネータ・司会について
- 開講式について
- シラバスについて
- 講師用 LMS マニュアルおよび事前説明について
- 第三者評価委員会について
- 平成21年度成果報告書について
- 共通基礎プログラム終了後の交流会について
- その他

第2回

- 日時 2010年8月2日(月)14:00～
- 場所 図書館館長執務室

出席者

- ・田隈図書館長(事業担当者)
- ・唯野教授
- ・豊田教授
- ・二瓶准教授
- ・平学務部次長(事業事務担当者)
- ・嵯峨課長
- ・照本職員(事務局)

議題

- 平成22年度プログラム進捗状況等について
 - ・経費執行状況等
- 公開講座について(参加申し込み状況・進行予定等)
 - ・大熊由紀子氏 公開講座 (2010年8月7日(土)14:00-15:30)
 - ・朝倉利光氏 特別講演 (2010年8月28日(土)14:00-15:30)

第3回

- 日時 2010年10月4日(月)11:00～
- 場所 図書館館長執務室

出席者

- ・田隈図書館長(事業担当者)
- ・唯野教授
- ・塚本教授
- ・二瓶准教授
- ・平学務部次長(事業事務担当者)
- ・嵯峨課長
- ・照本職員(事務局)

議題

- 共通基礎プログラムの受講状況
 - ・未修了予定者の対応について
 - ・公開講座と特別公開講座について
- 専門分野プログラムについて
 - 1) スケジュール確認
 - 2) 講師とのスケジュールおよび講義資料内容の確認・調整について
 - 3) コーディネータの先生の役割について
 - 4) 各講義受講者数の確認および聴講生への対応について (PC 等)
- 今後のスケジュールについて
 - 1) 第三者評価委員会開催について
 - 2) 成果報告書の作成について
- その他

第4回

- 日時 2010年12月1日(水)10:30～
- 場所 図書館館長執務室

出席者

- ・田隈図書館長(事業担当者)
- ・唯野教授
- ・塚本教授
- ・豊田教授
- ・二瓶准教授
- ・平学務部次長(事業事務担当者)
- ・嵯峨課長
- ・照本職員(事務局)

議題

- 平成22年度プログラム修了者について
- 演習欠席者からの要望について
- 平成22年度成果報告書の作成について
- LMS および機器等の対応について
- その他
 - 1) 平成22年度第2回第三者評価委員会の開催について
 - 2) 北見との事務打ち合わせについて
 - 3) その他



プロジェクト評価 (第三者評価委員会記録)

第1回 第三者評価委員会記録

- 日時 平成22年5月25日(火) 13:40 - 15:30
- 場所 北海道医療大学札幌サテライトキャンパス

第三者評価委員

- 出席者 ・高橋 保志 委員長(北海道薬剤師会医薬情報センター長)
- ・平川 由紀子 委員(北海道看護協会常任理事)
- ・黒澤 和子 委員(一般、薬剤師)
- 欠席者 ・五十嵐智嘉子 委員(北海道総合研究調査会常任理事)

コーディネータ

- 出席者 ・田隈 図書館長(プログラム事業担当者)
- ・唯野 教授(北海道医療大学)
- ・根本 准教授(日本赤十字北海道看護大学)
- ・平次長(プログラム事業事務担当者)
- ・四釜職員、照本職員(事務局)

議題

(1) 平成22年度プログラムの受講者数について

標記の件について、事務局より資料1に基づき説明があり、本年度は受講者総数76名(平成21年度同数)で開講することが報告された。

(2) 平成22年度プログラムの実施について

標記の件について、事務局より資料2に基づき説明があり、本年度は、受講生間の交流を深める場を設けること、LMS(遠隔授業用コミュニケーションシステム)の効果的な活用を図ること、北見会場の円滑な進行への配慮に努めることについて、具体的な報告がなされた。また、8月7日(土)、28日(土)に予定している公開講座について、評価委員への広報協力要請がなされた。

(3) 平成22年度プログラムの評価方法について

標記の件について、事務局より資料2に基づき説明があり、本年度は、受講生間の交流を深める場を設けること、LMS(遠隔授業用コミュニケーションシステム)の効果的な活用を図ること、北見会場の円滑な進行への配慮に努めることについて、具体的な報告がなされた。また、8月7日(土)、28日(土)に予定している公開講座について、評価委員への広報協力要請がなされた。

(4) その他

専門分野別プログラムの聴講については、札幌会場の「生活習慣病」と「感染症」および北見会場の4分野について受け付ける旨、報告がなされた。

第2回 第三者評価委員会記録

- 日時 平成22年12月17日(金) 13:00 - 16:30
- 場所 京王プラザホテル札幌 B1翡翠

第三者評価委員

- 出席者 ・高橋 保志 委員長(北海道薬剤師会医薬情報センター長)
- ・平川 由紀子 委員(北海道看護協会常任理事)
- ・黒澤 和子 委員(一般、薬剤師)
- 欠席者 ・五十嵐智嘉子 委員(北海道総合研究調査会常任理事)

コーディネータ

- 出席者 ・田隈 図書館長(プログラム事業担当者)
- ・根本 准教授(日本赤十字北海道看護大学)
- ・平次長(プログラム事業事務担当者)
- ・嵯峨課長(事務局)

提出資料

- 評価参考資料 ●評価票

議題

(1) 平成22年度事業プログラムの評価について

標記の件について、当事業プログラム事務担当者の平次長より、提出資料に基づき説明がなされ、引き続き各委員による評価が行われた。なお、本委員会を欠席された五十嵐委員の評価については、委員長に一任するとの申し出があり全員が了承した。

評価基準を5段階とし、各委員の評価数値を取りまとめた結果、総合評価はおおむね評価できる(4.7点)との評価結果であった。<評価基準および評価結果(委員3名による評価平均)については別添資料のとおり>

(2) その他

本事業の終了にあたって、各委員より今後の事業継続に対する要望について意見が述べられた。

◎文部科学省委託事業終了後も、大学として今後一部事業内容の変更を行ったにしても継続すべき事業であり、有益なプログラムであるとの声も多く、内容精査の上、何らかの対応をしていただきたい。<高橋委員長>

◎事業継続にあたり、展望のある検討結果を広報の一環として関係機関へ報告していただきたい。<高橋委員長>

◎講義出席者の満足度は個々に違っていると思うが、このプログラムは、さらに上を目指せるものである。患者サイドのニーズにより近づけることでさらにレベルアップするのではないかと希望を持って、今後を期待している。<黒澤委員>

◎現在、様々な研修会等は実施されているが、参加しにくい現実がある。また、医学の発達と必要なデータの入手方法やデータ処理など、看護職の年齢的なハンディキャップがあっても、「基礎から学べる」、「情報の取り方を併せて学べる」、「新たな情報も学べる」などすばらしいプログラムであった。ぜひ、継続できる方法を検討していただきたい。<平川委員>

◎大学図書館は学内者のみが利用するというイメージが強いが、学外への開放は大変助かっている。しかし、まだ開放の情報が十分に行き渡っていないので、今後も継続して積極的に広報していただきたい。<高橋委員長>

評価結果

1. 組織・運営体制について		評価
(1)	本プログラムの実施体制は適切であったか	4.3
(2)	講義開始までの準備内容は適切であったか	4.3
(3)	講義開始後のスケジュールは適切であったか	4.7
(4)	LMSはアクセス数から見て有効に利用されていたか	3.7
2. 講義開催までのプログラム広報などについて		評価
(1)	周知方法は適切であったか	4.3
(2)	パンフレットは、実際の講義内容などわかりやすい内容であったか	4.7
(3)	ホームページは見やすく、アクセスしやすい場所であったか	4.7
3. 受講のプロセスについて		評価
(1)	受講の流れについてわかりやすく、適切であったか	4.3
(2)	DVDやe-learningによる受講方法はわかりやすく、適切であったか	4.3
(3)	受講者間のコミュニケーションは円滑であったか	4.7
4. 講義内容について		評価
(1)	講義内容はプログラムの目的・目標に沿ったものであったか	4.3
(2)	開催日時は適切であったか	4.7
(3)	講義時間(1コマ1時間半)は適切であったか	4.3
(4)	開催場所は適切であったか	4.3
(5)	受講者の人数は適切であったか	4.3
5. 受講生の満足度・目標達成度について		評価
(1)	受講生の満足度は高まったか	4.7
(2)	受講生の目標達成度は高まったか	4.7

評価段階

5：評価できる 4：おおむね評価できる
3：普通 2：やや評価できない 1：評価できない

総合評価

4.7

北見会場での受講報告

◆ 開講式と受講生の概要

北見会場の開講式は6月5日に行われ、看護師12名、薬剤師6名の計18名が今年度の受講生となった。地域内訳は北見市内7名、網走6名、釧路2名、中標津、美幌と稚内が1名であり、北見から約120km離れた釧路からの受講生は、毎回自家用車にて来学されていた。北見会場が北海道東地域を広くカバーし、医療情報の地域格差を解消する意味を裏付けたものと考えられる。



◆ 公開講座について

8月7日に行われた大熊由紀子先生の公開講座には、受講生8名、一般参加2名、本学大学院生1名ならびに本学教員3名の計14名が参加し、サテライト中継を受講した。本学から約300km離れた札幌での講演をリアルタイムに受講し、患者の声が医療を変えはじめている実践の場を学んだ。



8月28日に行われた朝倉利光先生の特別講演には、受講生7名、本学教員1名の計8名がサテライト中継を受講し、医療と情報そしてコミュニケーションについて学びを深めた。



◆ 2010年のプログラムを終えて

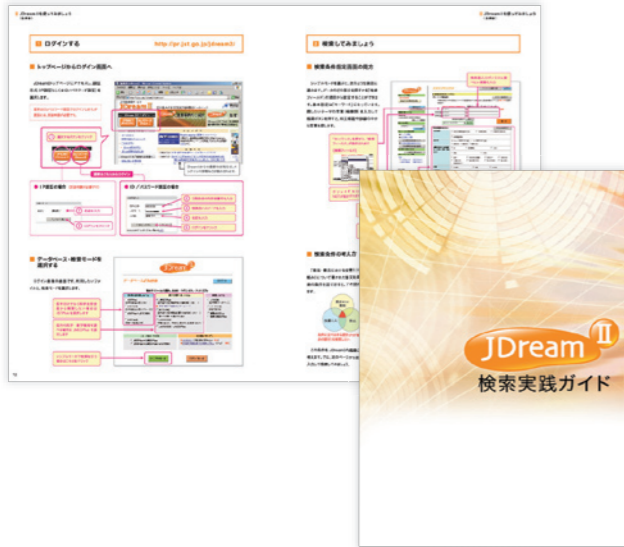
公開講座のみならず、本年のすべての中継は、メイン回線の動画ストリーミングに加え、バックアップ回線の動画ストリーミング(一部音声のみ)を採用したため、回線障害による中継の寸断を起こすことがなく、受講生の学びを深めることができた。このことは、実践後アンケートにおいても明らかとなった。

光回線網が普及してきたとはいえ、地方におけるインターネット回線は不安定な要素が伴う。本事業を通して、地方におけるe-ラーニングの実践手法を確立できたものと考えられる。

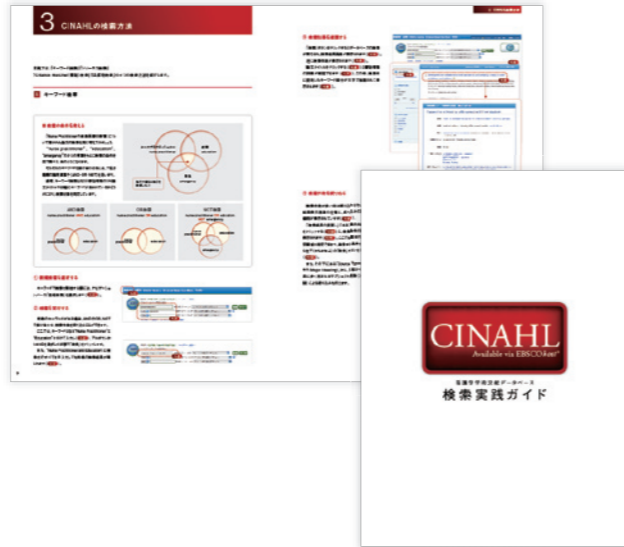


●文献情報検索マニュアルの作成

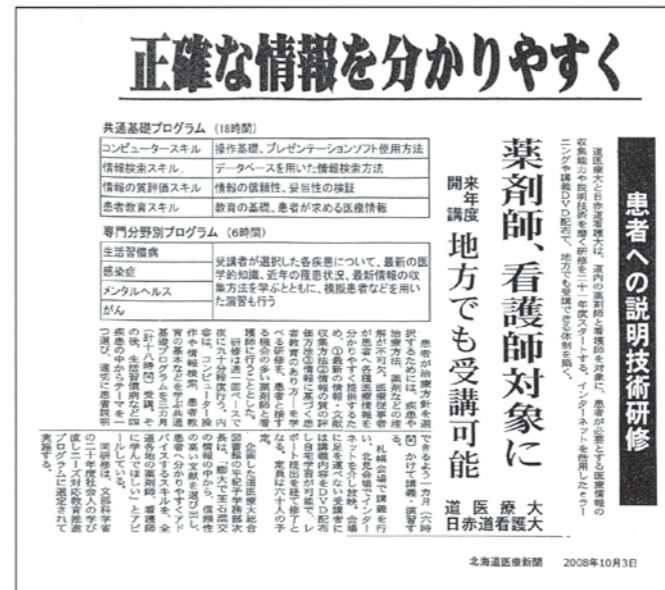
1. JDream II 検索実践ガイド



2. CINAHL 検索実践ガイド



●新聞掲載記事



北海道医療新聞2008年10月3日



北海道医療新聞2009年6月12日

●投稿論文

1. 平 紀子
「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム2009年度事業終了報告」
看護と情報. 2009;17:45-52.
2. 平 紀子
「文部科学省平成20年度社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム」
薬学図書館. 2009;54(3):206-218.
3. 二瓶 裕之他
「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラムにおけるe-Learning受講の実施報告」
北海道医療大学情報センター年報. 2009;7:31-38.
4. 平 紀子他
「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム2009年度事業終了報告」
北海道医療大学大学教育開発センター報告. 2010;2:114-127

●学会発表

1. 平 紀子、二瓶 裕之
「教職協働による地域連携」
京都. 2009.9.大学行政管理学会
2. 平 紀子
「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム—医療従事者のリカレント教育プログラムへの取り組み—」
いわき市.2010.8.
第27回医学情報サービス研究大会



北海道医療新聞2009年6月22日



北海道医療新聞

2010年(平成22年)4月16日



北海道医療新聞2010年4月16日



平成22年度 社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム
委託業務成果報告書

地域格差のない医療情報提供のための

薬剤師・看護師 教育プログラム

成果報告書

[整理番号 7444]

発行年月日／平成23年3月31日

発行／北海道医療大学

編集／北海道医療大学総合図書館

田隈 泰信(北海道医療大学総合図書館長)

平 紀子(北海道医療大学学務部次長)

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

TEL: 0133-23-1211(内線2002)

FAX: 0133-25-2014

E-mail: manabi@hoku-iryo-u.ac.jp

URL: <http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~gakumu/gp/manabinaoshi/>